

第27図 畑田遺跡 第VI層～第VIII層出土陶器⑤ (1 / 3)

播鉢 (第27図-240～250)

内面に3～11条の櫛描き放射線をもつ播鉢である。口縁部形態や焼き締め具合などから備前系の播鉢だと考えられる。

240～242・244～245は口縁部～体部である。口唇部は、わずかに凸面状に膨らみ、断面三角形を呈する。243・247～250は底部である。いずれも安定した平底である。246は、口縁部であり、櫛描き放射線が確認できないが、片口の播鉢であると判断した。

瓶子（第27図—251～253）

灰釉の瓷器系陶器の瓶子である。瀬戸系陶器だと考えられる。

251・252は胴部、253は肩部であり、同一個体だと考えられる。251～253は、外面には灰釉がかかっており、内面には輪積みを行った後にナデ消しを行っている。253は、一度被熱したと考えられ、変色して表面がザラザラしている。

深皿（第27図—254）

254は、灰釉の深皿の口縁部であり、瀬戸系陶器だと考えられる。口縁部が若干外反しており、折縁深皿の一種であると考えられる。

土瓶（第27図—255）

255は外面のみ褐色釉がかかった土瓶の蓋部である。攪乱土に混入して出土したため、第VI層以下で出土したと考えにくい。径74mmで高さ4mmの受部をもち、径17mm・高さ10mmのつまみをもつ。他の陶器と比べて時代が遡り、18～19世紀の薩摩系陶器である可能性が高い。

瓶（第27図—256）

256は褐色釉のかかった瓶の胴部である。「…□進…（改行）…□三日（改行）…□間藤□…」（□は何か書かれていると考えられる）と書かれている。他の陶器類とさほど離れていない時期のものであろう。

（3）磁器（第28図—257～290）

青磁碗（第28図—257～268）

257～262は口縁部～体部である。257は、くすんだ緑灰色の釉がかかり、内面に劃花文を施す。口縁部は直行する。258は、緑色の釉がかかり、外面に鎬蓮弁文を施す。口縁部は直行する。鎬蓮弁文は幅が広いタイプではあるが、若干不明瞭な鎬を片彫りで造り出している。259は、くすんだ緑灰色の釉がかかり、外面に鎬蓮弁文を施す。口縁部はわずかに外反する。鎬蓮弁文は幅広くなく、片彫りで明確な鎬を造り出している。260～262は、くすんだ緑灰色の釉がかかり、内外面無文である。口縁部はわずかに外反する。262は、内外面の釉に微細な乳が無数入る。

青磁坏（第28図—269～273）

269～271は口縁部～体部である。口縁部が内湾もしくは直立気味に立ち上がり、上端で短く屈曲する。269・270は体部外面に鎬蓮弁文を施す。269は細線の線描き文である。270は、彫り込んでいるが片彫りではなく、蓮弁としてのモチーフが崩れた段階であると考えられる。272・273は底部である。器壁厚く、高台の内面は無釉である。内面見込み部分には、細線の線描き花文が施されている。

263～268は体部～底部である。

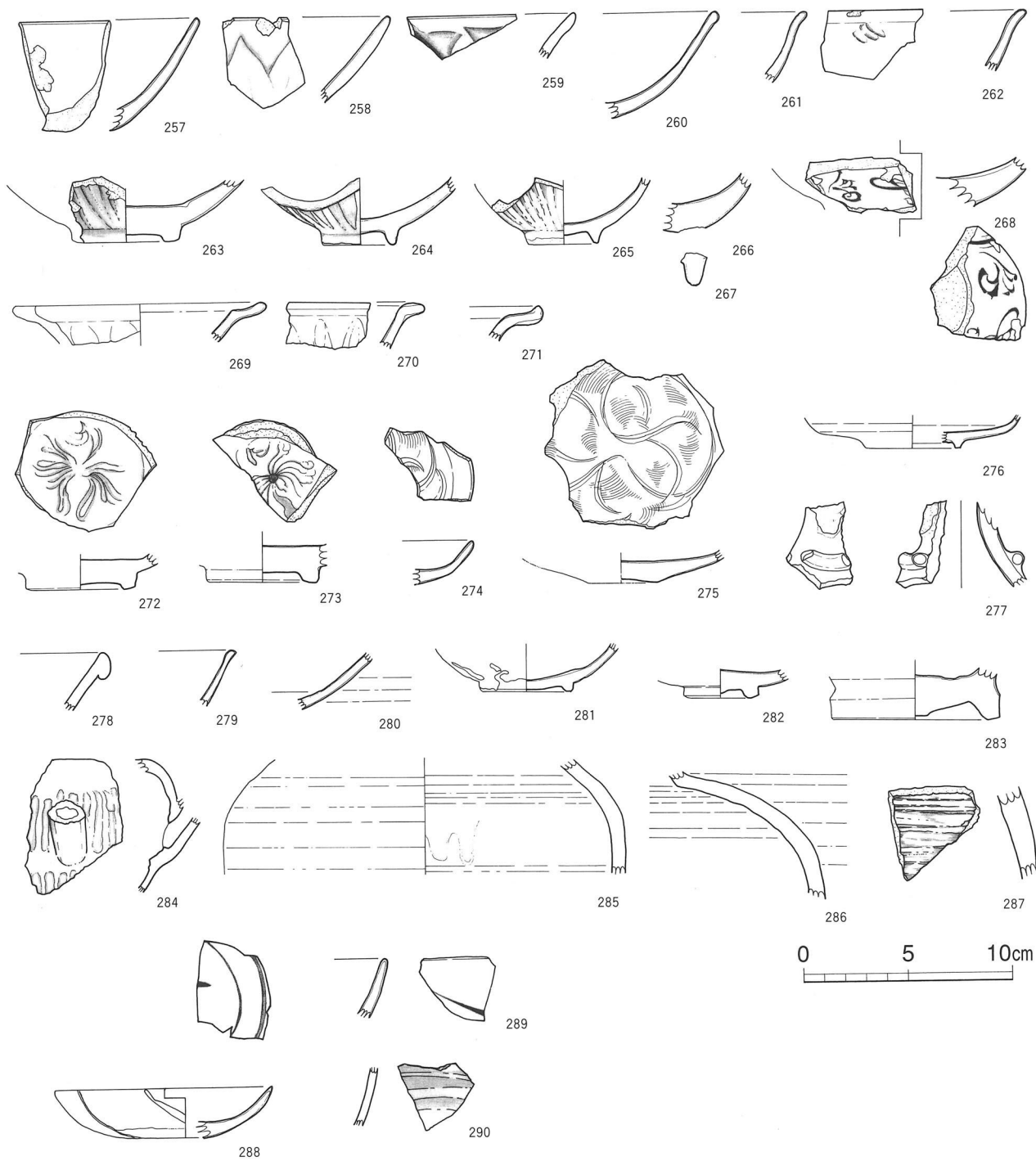
青磁皿（第28図—274～276）

（a）朽葉色系青磁皿（第28図—274～275）

胎土はきめ細やかで、朽葉色系緑色の釉を施す。内面見込み部分には毛彫花文を施している。龍泉窯同安系の青磁だと考えられる。

（b）淡緑色系青磁皿（第28図—276）

産地について不明であるが、中国産の青磁であると考えられる。胎土白色、器壁薄く、高台径小さく、



第28図 畑田遺跡 第VI層～第VIII層出土陶器⑥ (1 / 3)

底部と体部の境目の屈曲が大きい。

青磁水注 (第28図-277)

277は水注の頸部である。頸部は、復元した径は口縁側3.5cm・体部側6.3cmと細めであり、下方に行くに従って開く形をとる。釉は鮮やかな緑灰色であり、外面には耳部の不遊環と考えられる部分をもつことから、龍泉窯系青磁の双耳付き水注だと考えられる。細片であるため、ひょっとすると水注の注口部となる可能性もある。

白磁碗（第28図—278～282）

278・279は口縁部である。278は口唇部を折り曲げ玉縁状に肥厚させている。279は、器壁が薄く、口縁部端部で短く鋭く外反する。281は体部～底部である。底部には畳付きの幅が狭い径4.4cmの高台が付く。粘質のある釉のためか、体部下側部分の釉が疎らである。282は底部である。径3.7cmの比較的小さい高台が付く。釉は乳白色で、細かい乳が無数に入る。

白磁壺（第28図—283）

283は、高台付き壺の底部である。高台は、径8.0cm、断面形台形を呈し、厚くしっかりした造りとなっている。高台内面は中心部が凸状にやや膨らみ、中央部には「米」印のような印文がある。高台は内外面が全て無釉である。

白磁水注（第28図—284）

284は水注の注口部と体部である。注口部の内径1.0cmである。体部は、丸みを帯びており、外面に鎬連弁状の陽刻を施している。釉の色はくすんだ灰色であり、本来白色であったものが被熱により変色したと考えられる。

青白磁壺（第28図—285～287）

285～287は青白磁の壺である。3点は同一個体であると考えられる。灰色の胎土に青白色の釉が施されている。全体に横方向のケズリが確認される。産地については不明であるが、中国産であると考えられる。

磁器碗（第28図—288～290）

288は碗の口縁部～底部である。口縁部と体部内面には横線、体部外面には鳥のような文様が施されている。底部は外面無釉の碁笥底である。景德鎮産だと考えられる。289は口縁部片である。体部外面に染付の文様が看取できるが、何の文様かは細片であるため不明である。288同様景德鎮産だと考えられる。290は体部片である。外面に染付が看取できるが、何の文様かは細片であるため不明である。

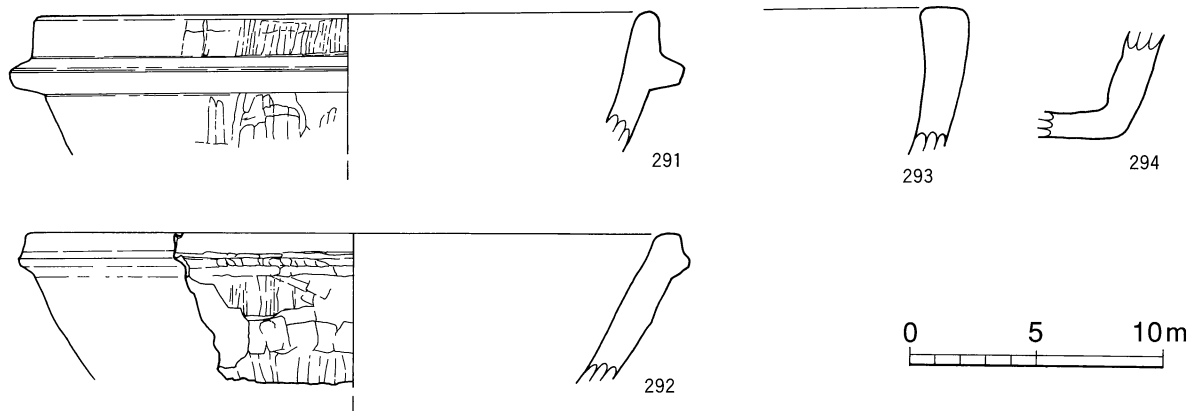
（4）その他（第29図—291～294）

滑石製石鍋（第29図—291～292）

291・292は滑石製石鍋の口縁部から底部にかけての部分である。291・292はともに、底部から口縁部にかけて緩やかに開く形態であり、外面に細かい鑿痕らしき削り跡が確認できる。ともに全体に口縁部下に削り出された鏝部をもつ。291は鏝部の張り出しが約1.1cmの台形を呈するのに対し、292は、口縁部直下に鏝部をもち、鏝部断面形が約0.5cmの三角形に近い小さな台形を呈する。

瓦質土器（第29図—293～294）

293は口縁部である。外面は風化著しく不明瞭であるが、内面は横方向の丁寧なヘラミガキが確認できる。緩やかに内湾しながら立ち上がる器形を呈し、浅鉢の類であると考えられる。294は直角気味に立ち上がる底部である。外面は風化著しいが横方向のヘラミガキが、内面は底部と体部の補強のためか回転ナデ調整が確認できる。深鉢か浅鉢かわからないが鉢の類であろう。



第29図 畑田遺跡 第VI層～第VIII層出土石鍋・瓦質土器 (1 / 3)

遺物 番号	器種	部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の 特徴	分類
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	12.5	8.0	3.7	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅰ類
2	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	12.1	7.7	4.1	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅰ類
3	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	11.6	7.2	3.9	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅰ類
4	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	11.2	6.5	3.7	回転横ナデ	風化著しく 調整不明	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅰ類
5	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	14.2	8.3	4.0	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	明黄褐	極細砂粒	坏Ⅱ類
6	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	13.4	8.3	4.1	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	淡黄	極細砂粒	坏Ⅱ類
7	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	12.8	7.0	3.6	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅱ類
8	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	12.4	7.6	4.1	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅱ類
9	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	14.0	9.8	3.7	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅲ類
10	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	13.0	8.8	3.1	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅲ類
11	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	13.0	10.2	3.8	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	灰白	極細砂粒	坏Ⅲ類
12	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	13.6	7.9	3.8	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅲ類
13	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅰ区溝		8.7		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	明黄褐	極細砂粒	坏Ⅲ類
14	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	15.4	8.0	4.0	回転横ナデ	回転横ナデ	淡黄	淡黄	極細砂粒	坏Ⅳ類
15	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	13.9	8.9	3.9	回転横ナデ	回転横ナデ	黄橙	明黄褐	極細砂粒	坏Ⅳ類
16	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	14.1	9.0	5.1	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	明黄褐	極細砂粒	坏Ⅳ類
17	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	14.0	8.2	3.9	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅳ類
18	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 8～9ライン	14.0	8.1	4.3	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅳ類
19	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅰ区上層		9.8		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅳ類
20	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	13.8	8.8	4.4	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅴ類
21	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	12.7	7.8	4.1	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅴ類
22	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	12.7	7.8	4.1	回転横ナデ	回転横ナデ	—	—	極細砂粒	坏Ⅴ類
23	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	12.6	8.2	4.0	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅴ類
24	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	12.6	5.6	3.9	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅴ類
25	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	12.2	8.1	4.0	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅴ類
26	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	12.2	7.6	3.7	回転横ナデ	回転横ナデ	明褐	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅴ類
27	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 8～9ライン	12.1	8.1	3.6	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅴ類
28	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	11.7	7.7	3.6	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅴ類
29	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	13.7	8.5	4.5	回転横ナデ	回転横ナデ	明黄褐	褐灰	極細砂粒	坏Ⅵ類
30	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	13.4	8.3	4.3	回転横ナデ	回転横ナデ	黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅵ類
31	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	13.2	7.7	3.8	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅵ類
32	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	12.7	7.9	3.9	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅵ類
33	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 8～9ライン	12.5	8.3	3.8	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅵ類
34	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	13.0	7.9	4.8	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅵ類
35	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 7～9ライン	12.2	8.0	3.9	回転横ナデ	回転横ナデ	明黄橙	明褐	極細砂粒	坏Ⅵ類
36	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		8.4		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅵ類

第1表 畑田遺跡 出土遺物観察表 (土師器) ①

遺物番号	器種	部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	分類
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
37	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		8.0		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅵ類
38	土師器 坏	口縁～ 底部	I区溝		7.9		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅵ類
39	土師器 坏	口縁～ 底部	I区上層		7.2		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅵ類
40	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	13.0	9.0	3.9	回転横ナデ	砂粒付着につ き調整不明	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅶ類
41	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 7～8ライン	12.4	8.9	4.1	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅶ類
42	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	12.9	8.1	3.8	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅶ類
43	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	12.8	8.0	3.9	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅶ類
44	土師器 坏	口縁～ 底部	I区溝	12.8	7.6	4.2	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅶ類
45	土師器 坏	口縁～ 底部	I区下層	12.5	8.5	4.4	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅶ類
46	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 8～9ライン	12.4	8.0	3.9	回転横ナデ	回転横ナデ	明黄褐	明黄褐	極細砂粒	坏Ⅶ類
47	土師器 坏	口縁～ 底部	I区溝	12.2	9.8	4.2	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅶ類
48	土師器 坏	口縁～ 底部	I区溝	11.6	7.3	3.6	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅶ類
49	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		8.1		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅶ類
50	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		8.0		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅶ類
51	土師器 坏	口縁～ 底部	I区溝		7.3		回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅶ類
52	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	12.5	8.2	3.8	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅷ類
53	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	12.2	7.8	3.8	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅷ類
54	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	12.2	7.4	3.8	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅷ類
55	土師器 坏	口縁～ 底部	I区溝	11.7	7.8	4.1	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅷ類
56	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 8～9ライン	11.6	8.1	3.6	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	極細砂粒	坏Ⅷ類
57	土師器 坏	口縁～ 底部	I区下層		7.2		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅷ類
58	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	13.0	9.0	4.6	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅸ類
59	土師器 坏	口縁～ 底部	I区下層	12.8	8.8	3.6	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅸ類
60	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 8～9ライン	12.4	8.0	3.5	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅸ類
61	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 8～9ライン	12.1	9.2	3.4	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	灰白	極細砂粒	坏Ⅸ類
62	土師器 坏	口縁～ 底部	I区下層	13.3	10.2	2.0	回転横ナデ	風化著しく 調整不明	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅸ類
63	土師器 坏	口縁～ 底部	I区下層	11.6	8.7	4.0	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅸ類
64	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	11.6	8.2	4.4	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅸ類
65	土師器 坏	口縁～ 底部	I区下層	11.4	8.5	3.8	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅸ類
66	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 7～8ライン	11.0	8.0	3.7	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅸ類
67	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 7～8ライン		9.0		回転横ナデ	回転横ナデ	褐	黄褐	極細砂粒	坏Ⅸ類
68	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	12.9	10.6	4.1	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅹ類
69	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	11.4	9.0	3.6	回転横ナデ	回転横ナデ	灰黄褐	灰黄褐	極細砂粒	坏Ⅹ類
70	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		10.2		回転横ナデ	回転横ナデ	褐	褐	極細砂粒	坏Ⅺ類
71	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		8.9		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅺ類
72	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区		8.7		砂粒付着につ き調整不明	砂粒付着につ き調整不明	橙	橙	極細砂粒	坏Ⅺ類

第2表 畑田遺跡 出土遺物観察表 (土師器) ②

遺物 番号	器種	部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の 特徴	分類
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
73	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		8.6		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅺ類
74	土師器 坏	底部	Ⅱ区下層 6～7ライン		8.1		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅺ類
75	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		7.7		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅺ類
76	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区		7.6		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅺ類
77	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		7.6		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅺ類
78	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		7.6		回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅺ類
79	土師器 坏	底部	Ⅱ区下層 8～9ライン		7.2		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅺ類
80	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層		7.0		回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	極細砂粒	坏Ⅺ類
81	土師器 坏	口縁～ 底部	I区下層		9.4		回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
82	土師器 坏	口縁～ 底部	I区下層		9.3		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅻ類
83	土師器 坏	口縁～ 底部	I区溝		9.0		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
84	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		8.4		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	黄灰褐	極細砂粒	坏Ⅻ類
85	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区		8.3		回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
86	土師器 坏	底部	I区下層		8.2		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅻ類
87	土師器 坏	底部	Ⅱ区下層 8～9ライン		8.1		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅻ類
88	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		8.1		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅻ類
89	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区		8.0		回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
90	土師器 坏	底部	I区下層		7.9		回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
91	土師器 坏	底部	I区上層		7.9		回転横ナデ	回転横ナデ	橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
92	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		7.9		回転横ナデ	回転横ナデ	明褐	黄褐	極細砂粒	坏Ⅻ類
93	土師器 坏	底部	Ⅱ区下層 7～8ライン		7.3		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
94	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		7.3		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
95	土師器 坏	底部	I区下層		7.2		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	極細砂粒	坏Ⅻ類
96	土師器 坏	底部	I区溝		7.1		回転横ナデ	回転横ナデ	灰黄褐	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
97	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区		5.6		回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
98	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区		8.2		回転横ナデ	回転横ナデ	淡黄褐	淡黄褐	極細砂粒	坏Ⅻ類
99	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区		8.3		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
100	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区		8.2		回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 褐	にぶい 褐	極細砂粒	坏Ⅻ類
101	土師器 坏	底部	I区溝		8.1		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
102	土師器 坏	底部	Ⅱ区下層 9ライン		7.9		回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
103	土師器 坏	底部	I区上層		7.8		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
104	土師器 坏	底部	I区溝		7.7		回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	にぶい 黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
105	土師器 坏	底部	I区溝		7.5		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅻ類
106	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区	7.5		回転横 ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	極細砂 粒	坏ⅩⅢ類	坏Ⅻ類
107	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層	7.5		回転横 ナデ	回転横ナデ	灰 黄	灰 黄	極細砂 粒	坏ⅩⅢ類	坏Ⅻ類
108	土師器 坏	口縁～ 底部	I区溝	7.3		回転横 ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂 粒	坏ⅩⅢ類	坏Ⅻ類

第3表 畑田遺跡 出土遺物観察表（土師器）③

遺物 番号	器種	部位	出土地点	法 量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の 特 徴	分 類
				口 径	底 径	器 高	外 面	内 面	外 面	内 面		
109	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区		6.6		回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	坏Ⅳ類
110	土師器 坏	底 部	Ⅱ区下層 9ライン		6.4		回転横ナデ	回転横ナデ	灰 黄	黒 褐	極細砂粒	坏Ⅳ類
111	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区		6.2		回転横ナデ	回転横ナデ	灰 白	灰 白	極細砂粒	坏Ⅳ類
112	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン		5.8		回転横ナデ	回転横ナデ	明 褐	明 褐	極細砂粒	坏Ⅳ類
113	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区		5.5		回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	極細砂粒	坏Ⅳ類
114	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	8.7	7.7	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	極細砂粒	皿Ⅰ類
115	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区下層	8.6	6.7	1.6	回転横ナデ	回転横ナデ	—	—	極細砂粒	皿Ⅰ類
116	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	8.1	7.2	1.2	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	極細砂粒	皿Ⅰ類
117	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	7.9	6.4	1.7	回転横ナデ	回転横ナデ	—	—	極細砂粒	皿Ⅰ類
118	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 8～9ライン	7.9	6.4	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	皿Ⅰ類
119	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	7.7	5.6	1.3	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	皿Ⅰ類
120	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区下層	7.6	6.0	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 白	浅黄橙	極細砂粒	皿Ⅰ類
121	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 8～9ライン	7.1	5.6	1.3	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	極細砂粒	皿Ⅰ類
122	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区	8.5	6.4	1.6	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	極細砂粒	皿Ⅱ類
123	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 8～9ライン	7.9	6.3	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	皿Ⅱ類
124	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区	7.8	6.3	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	極細砂粒	皿Ⅱ類
125	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区	7.8	6.3	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰黄	暗灰黄	極細砂粒	皿Ⅱ類
126	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区	7.8	6.1	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	極細砂粒	皿Ⅱ類
127	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区	7.6	5.5	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	極細砂粒	皿Ⅱ類
128	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区	7.3	6.1	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	皿Ⅱ類
129	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区	7.3	5.9	1.6	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	極細砂粒	皿Ⅱ類
130	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	7.2	5.9	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	明黄褐	灰黄褐	極細砂粒	皿Ⅱ類
131	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	8.3	6.3	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰黄	黄 灰	極細砂粒	皿Ⅲ類
132	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区	8.3	6.3	1.7	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	極細砂粒	皿Ⅲ類
133	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	8.1	6.7	1.7	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	橙	極細砂粒	皿Ⅲ類
134	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区	8.0	6.4	2.0	回転横ナデ	回転横ナデ	橙	明 褐	極細砂粒	皿Ⅲ類
135	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	8.0	6.3	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	皿Ⅲ類
136	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	7.8	6.4	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	皿Ⅲ類
137	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	7.8	6.1	1.9	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	灰 白	極細砂粒	皿Ⅲ類
138	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	7.7	6.0	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄 橙	浅黄橙	極細砂粒	皿Ⅲ類
139	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	7.5	6.2	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 白	灰 白	極細砂粒	皿Ⅲ類
140	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区	7.5	5.9	1.7	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	皿Ⅲ類
141	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	8.0	6.3	1.6	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	黄 灰	極細砂粒	皿Ⅳ類
142	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	8.0	5.8	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	灰黄褐	灰黄褐	極細砂粒	皿Ⅳ類
143	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区	7.8	5.8	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	明赤褐	明 褐	極細砂粒	皿Ⅳ類
144	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 8～9ライン	7.7	5.9	1.3	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	淡赤褐	極細砂粒	皿Ⅳ類

第4表 畑田遺跡 出土遺物観察表（土師器）④

遺物 番号	器種	部位	出土地点	法 量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の 特 徴	分 類
				口 径	底 径	器 高	外 面	内 面	外 面	内 面		
145	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 7～8ライン	7.4	5.9	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	極細砂粒	ⅢⅣ類
146	土師器 小皿	底 部	Ⅰ区下層	8.3	6.1	1.7	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 白	灰 白	極細砂粒	ⅢⅤ類
147	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 7～8ライン	8.2	7.1	1.8	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	極細砂粒	ⅢⅤ類
148	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区下層	7.9	5.5	2.5	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅤ類
149	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	7.8	6.7	1.3	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅤ類
150	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 8～9ライン	7.8	6.2	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅤ類
151	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	7.7	6.4	1.7	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	極細砂粒	ⅢⅤ類
152	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	7.6	6.2	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 褐	極細砂粒	ⅢⅤ類
153	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	7.5	6.0	1.5	砂粒付着につ き調整不明	回転横ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	極細砂粒	ⅢⅤ類
154	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	8.4	7.0	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	淡黄褐	淡黄褐	極細砂粒	ⅢⅥ類
155	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	8.0	7.7	1.3	回転横ナデ	回転横ナデ	褐	明 褐	極細砂粒	ⅢⅥ類
156	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	8.0	6.2	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	明褐灰	明褐灰	極細砂粒	ⅢⅥ類
157	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	7.9	6.2	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	極細砂粒	ⅢⅥ類
158	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	7.9	6.1	1.7	回転横ナデ	回転横ナデ	明黄褐	明黄褐	極細砂粒	ⅢⅥ類
159	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	7.8	6.0	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅥ類
160	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	7.7	5.7	1.6	回転横ナデ	回転横ナデ	—	—	極細砂粒	ⅢⅥ類
161	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	7.6	5.9	1.2	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	極細砂粒	ⅢⅥ類
162	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	7.5	5.6	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	明黄褐	明黄褐	極細砂粒	ⅢⅥ類
163	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	7.4	5.8	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅥ類
164	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 6～7ライン	7.3	5.9	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅥ類
165	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	7.3	5.3	1.4	砂粒付着につ き調整不明	砂粒付着につ き調整不明	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅥ類
166	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	8.0	6.2	1.6	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 白	灰 白	極細砂粒	ⅢⅦ類
167	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	8.0	5.8	1.6	回転横ナデ	回転横ナデ	—	—	極細砂粒	ⅢⅦ類
168	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅱ区下層	7.9	6.2	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	極細砂粒	ⅢⅦ類
169	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ区下層 7～8ライン	7.8	6.0	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅦ類
170	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	7.7	6.3	1.7	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅦ類
171	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	7.6	5.8	1.4	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	明 褐	極細砂粒	ⅢⅦ類
172	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	7.0	5.3	1.3	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅦ類
173	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区下層	7.8	6.5	1.8	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 白	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅧ類
174	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	7.4	5.8	1.9	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅧ類
175	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅰ区溝	7.6	5.8	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい 黄 橙	黄 橙	極細砂粒	ⅢⅧ類
176	土師器 小皿	口縁～ 底部	Ⅱ 区	8.3	6.1	1.5	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅧ類
177	土師器 坏	口縁～ 底部	Ⅰ区下層	12.9	9.6	3.2	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	極細砂粒	ⅢⅨ類

第5表 畑田遺跡 出土遺物観察表（土師器）⑤

遺物番号	器種	部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	分類
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
178	陶器甕	口縁～胴部	Ⅱ区ほか	41.6			回転横ナデ・施釉	回転横ナデ・粗い指ナデ	灰・オリブ黄	にぶい褐色	精良	常滑
179	陶器甕	口縁～胴部	Ⅱ区下層	36.8			回転横ナデ・施釉・工具による斜方向のナデ	回転横ナデ・粗い指ナデ	灰褐・明褐	灰褐・褐	精良	常滑・スタンプ文
180	陶器甕	口縁～胴部	Ⅱ区下層9～10ライン				回転横ナデ	回転横ナデ・上方方向の指ナデ	明褐	明褐	精良	常滑
181	陶器甕	口縁部	Ⅱ区下層				回転横ナデ	回転横ナデ・施釉	灰褐・灰オリブ	灰褐	精良	常滑
182	陶器甕	口縁～頸部	Ⅱ区下層9～10ライン				回転横ナデ・釉付着	回転横ナデ・釉付着	にぶい赤褐	にぶい橙	精良	常滑
183	陶器甕	口縁～頸部	Ⅱ区下層				回転横ナデ	回転横ナデ	灰黄褐	灰黄褐	精良	常滑
184	陶器甕	口縁～頸部	Ⅱ区下層				回転横ナデ	回転横ナデ・縦方向の指ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	精良	常滑
185	陶器甕	口縁～頸部	Ⅱ区下層				回転横ナデ・一部指頭痕あり	回転横ナデ	灰黄褐	灰黄褐	精良	常滑
186	陶器甕	口縁～頸部	Ⅱ区下層				回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	精良	常滑
187	陶器甕	口縁～頸部	Ⅱ区下層7～8ライン				回転横ナデ・釉付着	回転横ナデ・釉付着	明褐・にぶい褐	褐	精良	常滑
188	陶器甕	口縁～頸部	Ⅱ区下層9～10ライン				回転横ナデ・釉付着	回転横ナデ・釉付着	灰褐	褐	精良	常滑
189	陶器甕	肩部	Ⅱ区下層10ライン				ナデ・釉付着	ナデ	淡黄	灰褐	精良	常滑・スタンプ文
190	陶器甕	肩部	Ⅱ区				ナデ・釉付着	粗いナデ	にぶい黄橙	灰褐	精良	常滑・スタンプ文
191	陶器甕	肩部	Ⅱ区下層9～10ライン				ナデ・釉付着	ナデ	淡黄	灰黄褐	精良	常滑・スタンプ文
192	陶器甕	肩部	Ⅱ区下層				横方向のナデ・施釉	横方向の粗いナデ	灰赤褐	灰赤褐	精良	常滑
193	陶器甕	肩部	Ⅰ区溝中				施釉	横方向のナデ	灰オリブ	にぶい橙	精良	常滑・スタンプ文
194	陶器甕	胴部	Ⅱ区下層9～10ライン				横ナデ	粗いナデ	黄褐	にぶい橙黄褐	精良	常滑・スタンプ文
195	陶器甕	口縁～頸部	Ⅱ区下層				横・斜方向のナデ・施釉	横方向の粗いナデ	灰黄褐	灰黄褐	精良	常滑
196	陶器甕	胴部	Ⅱ区下層9～10ライン				回転横ナデ・釉付着	粗いナデ	灰黄	暗灰黄	精良	常滑・スタンプ文
197	陶器甕	胴部	Ⅱ区下層				縦方向にナデの後工具による縦方向のナデ	指によるナデの後工具による横方向のナデ	灰黄褐	灰黄褐	精良	常滑
198	陶器甕	胴部	Ⅰ区溝中				工具と指によるナデ	工具と指によるナデ	にぶい黄褐	黒オリブ	精良	常滑
199	陶器甕	胴部					回転横ナデ・施釉	横・斜方向の粗いナデ			精良	常滑
200	陶器甕	頸部～胴部	Ⅱ区下層				回転横ナデ・施釉	粗い横ナデ	灰褐・灰オリブ	灰褐	精良	常滑
201	陶器甕	胴部～底部	Ⅱ区下層8～9ライン・Ⅰ区下層	22.3			粗い指ナデ	横方向のナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	精良	常滑
202	陶器甕	底部	Ⅱ区下層7～8ライン	19.6			工具による斜方向のナデ	工具と指による上方方向のナデ	暗灰黄	灰黄褐	精良	常滑
203	陶器甕	底部	Ⅱ区下層				縦・横方向の工具によるナデ	工具による横方向のナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	精良	常滑
204	陶器甕	胴部～底部	Ⅰ区溝中	17.9			工具による斜方向のナデ	横方向の指ナデ・工具による縦方向のナデ	にぶい褐	にぶい褐・灰白	精良	常滑
205	陶器甕	底部	Ⅰ区溝中				ナデ	ナデ・施釉	灰オリブ	灰白	精良	常滑
206	陶器甕	口縁～胴部	Ⅰ区溝中・Ⅱ区下層	22.2			丁寧なナデ・施釉・頸部に斜方向の施文	回転横ナデ・斜方向にハケ目	黒灰	暗灰	精良	鉄釉陶器
207	陶器甕	胴部	Ⅰ区溝中・Ⅱ区下層				丁寧なナデ・施釉	ナデの後斜方向にハケ目	黒灰	暗灰	精良	鉄釉陶器
208	陶器甕	底部	Ⅰ区溝中				工具と指によるナデ	同心円状の粗い指ナデ	黒灰	暗灰	精良	鉄釉陶器
209	陶器甕	口縁～肩部	Ⅱ区下層8～9ライン・Ⅱ区下層	18.4			丁寧なナデ・施釉・頸部に斜方向の施文	回転横ナデ・斜方向にハケ目	黒灰	暗灰	精良	鉄釉陶器
210	須恵器甕	口縁～胴部	Ⅱ区溝中・Ⅰ区下層	31.7			回転横ナデ・カキ目による綾杉文	横ナデ	灰	灰白	精良	須恵器・瓦質

第6表 畑田遺跡 出土遺物観察表 (陶磁器) ⑥

遺物番号	器種	部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	分類
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
211	須恵器甕	胴部	II区下層				格子目タタキ	平行状の当て具痕あり	灰	灰	精良	須恵器
212	須恵器?甕	胴部?	II区下層溝				全面にタタキ	ナデ・当て具痕あり	にぶい褐	灰・白		須恵器? 風化著しい
213	須恵器甕	胴部	II区下層				格子目タタキ	平行状と同心円状の当て具痕あり	黒灰	暗灰	精良	須恵器
214	須恵器甕	胴部	I区上層				格子目タタキ	当具痕の上をナデ	灰	灰	精良	須恵器
215	須恵器甕	胴部	II区下層10ライン				縦方向の平行タタキの後横方向のハケ目	同心円状の当て具痕あり	灰	灰	精良	須恵器
216	須恵器甕	胴部	II区下層				縦横方向の平行タタキで格子文表現	平行状と同心円状の当て具痕あり	灰・淡橙	灰・淡橙	精良	須恵器被熱か?
217	陶器甕?	胴部?	II区下層9~10ライン				横・斜方向のタタキ・鉄釉付着	斜方向のナデ	黒褐	灰	精良	鉄釉陶器
218	須恵器甕	胴部	I区溝中				平行タタキ	同心円状当て具痕上をナデ	黒灰	暗灰	精良	須恵器
219	須恵器甕	胴部	I区下層				平行タタキ	同心円状の当て具痕あり	灰	淡黄	精良	須恵器被熱か?
220	須恵器甕	胴部	II区下層				不定方向の平行タタキ	当て具痕の上をナデ	暗灰	暗灰	精良	須恵器
221	陶器?	底部	II区下層7~8ライン		8.2		回転横ナデ	ナデ	灰	灰	精良	不明
222	陶器甕	口縁~頸部	II区下層	24.0			回転横ナデ・工具による縦方向のナデ	工具による横方向のナデ・回転横ナデ	灰黄	灰黄	精良	模造常滑?
223	陶器壺	頸部	II区下層				回転横ナデ・工具による縦方向のナデ	回転横ナデ・工具による横方向のナデ	灰	灰白	精良	須恵器系
224	陶器壺	胴部~底部	II区下層9~10ライン				工具による縦方向のナデ・篋切り底	工具による横方向のナデ	灰	灰白	精良	須恵器系
225	陶器甕	胴部	II区下層6~7ライン				不定方向のナデ・平行タタキ	施釉	灰白	灰白	精良	渥美?
226	陶器甕	胴部	I区下2層7~8ライン				斜方向のタタキ	ナデ	灰	灰白	精良	渥美?
227	陶器甕	口縁~頸部	II区西溝中				回転横ナデ	回転横ナデ・横方向のナデ	灰白	灰白	精良	備前
228	陶器甕	口縁~頸部	II区下層	10.6			回転横ナデ	回転横ナデ	赤橙褐	にぶい赤橙	精良	備前
229	陶器甕	口縁~頸部	I区溝中				回転横ナデ・施釉	回転横ナデ	灰オリブ	灰オリブ	精良	備前
230	舶載陶器・壺	胴部	I区下層・II区下層9~10ライン				ナデ・施釉・横位の沈線	横方向の指ナデ後工具による横方向のナデ	暗赤褐	暗黄褐	精良	中国南部産231と同一個体
231	舶載陶器・壺	胴部	II区下層9~10ライン				ナデ・施釉・横位の沈線	横方向の指ナデ後工具による横方向のナデ	暗赤褐	暗黄褐	精良	中国南部産230と同一個体
232	陶器壺	胴部~底部	II区下層9~10ライン				回転横ナデ	回転横ナデ	暗赤褐	暗黄褐	精良	中国南部産230と同一個体
233	陶器壺	頸部	II区下層	2.6			施釉	無釉・横方向のナデ	黒褐	灰白	精良	古瀬戸
234	陶器甕	口縁部	II区溝中				釉付着・4条の沈線	回転横ナデ釉付着	黒灰	黒灰	精良	鉄釉陶器
235	陶器甕?	胴部	I区下2層7~8ライン				ナデの後カキ目	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	精良	
236	陶器鉢	口縁部	II区下層7~8ライン	29.3			回転横ナデ	回転横ナデ	灰・黄灰	灰	精良	須恵器
237	陶器甕	口縁部	II区下層7~8ライン				回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	精良	須恵器
238	陶器甕	口縁部	I区下層				回転横ナデ	回転横ナデ	灰白	灰白	精良	須恵器
239	陶器鉢?	口縁部	II区下層9~10ライン				横方向のナデ	横方向のナデ・横方向のミガキ	淡橙	淡橙	精良	須恵器
240	陶器播鉢	口縁~胴部	I区上・II区	27.8			回転横ナデ	回転横ナデ7条のカキ目	灰	灰	精良	備前
241	陶器播鉢	口縁部	II区下層8~9ライン				回転横ナデ	回転横ナデ7条のカキ目	にぶい赤褐	にぶい赤褐	精良	備前
242	陶器播鉢	口縁~胴部	II区	21.6			回転横ナデ・斜方向のナデ	回転横ナデ8条のカキ目	灰	灰	精良	備前

第7表 畑田遺跡 出土遺物観察表 (陶磁器) ⑦

遺物 番号	器種	部位	出土地点	法 量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の 特 徴	分 類
				口 径	底 径	器 高	外 面	内 面	外面	内面		
243	陶器 播鉢	胴部～ 底部	Ⅱ区		12.5		回転横ナデ・ 斜方向のナデ	回転横ナデ・ 9条のカキ目	灰	灰	精 良	備 前
244	陶器 播鉢	口縁部	Ⅱ区				回転横ナデ	回転横ナデ・ 3条のカキ目	灰	灰	精 良	備 前
245	陶器 播鉢	口縁部	Ⅰ区溝				回転横ナデ	回転横ナデ・ カキ目	灰	灰	精 良	備 前
246	陶器 播鉢	口縁部	Ⅱ区下層9 ～10ライン				斜方向のハケ 目の後横ナデ	回転横ナデ	赤褐色	赤褐色	精 良	備 前
247	陶器 播鉢	胴部～ 底部	下 層				横方向のナデ	回転横ナデ・ 11条のカキ目	赤 褐	にぶい 橙	精 良	備 前
248	陶器 播鉢	胴部～ 底部	Ⅱ区下層9 ～10ライン				不定方向のナ デ	丁寧なナデ・ 6条のカキ目	灰	灰	精 良	備 前
249	陶器 播鉢	胴部～ 底部	Ⅱ区下層 10ライン				ナ デ	丁寧なナデ・5条 以上のカキ目	灰	暗 灰	精 良	備 前
250	陶器 播鉢	胴部～ 底部	Ⅱ区下層		15.6		不定方向のナ デ・指頭痕	ナデ・ 4条のカキ目	灰 白	灰	精 良	備 前
251	陶器 瓶子	胴 部	Ⅰ区溝中・ Ⅱ区溝中				施 釉	横方向のナデ・ 指頭痕	オリーブ 黄	灰 白	精 良	古瀬戸
252	陶器 瓶子	胴 部	Ⅱ区下層				施 釉	横方向のナデ・ 指頭痕	オリーブ 黄	灰 白	精 良	古瀬戸
253	陶器 瓶子	肩 部	Ⅱ区下層9 ～10ライン				回転横ナデ・釉 ・3条の沈線	横方向のナデ	にぶい 黄	灰 白	精 良	古瀬戸
254	陶器 深皿	口縁～ 体部	Ⅱ区下層9 ～10ライン				施 釉	施 釉	にぶい 灰 黄	にぶい 灰 黄	精 良	古瀬戸
255	陶器 土瓶	蓋 部	Ⅱ区下層9 ～10ライン	7.0			施 釉	無 釉	暗 褐	にぶい 赤 褐	精 良	薩摩系
256	陶器 壺?瓶?	胴 部	Ⅰ区溝中				施釉・文字あり	施 釉	暗 褐	黒 褐	精 良	中国産
257	青磁 椀	口縁～ 体部	Ⅱ区下層9 ～10ライン				施 釉	施釉・蓮弁文	灰オリー ブ	灰オリー ブ	精 良	龍泉窯系
258	青磁 椀	口縁～ 体部	Ⅱ区下層				施釉・鎬蓮弁文	施 釉	緑 灰	緑 灰	精 良	龍泉窯系
259	青磁 椀	口縁部	Ⅰ区下層				施釉・鎬蓮弁文	施 釉	オリーブ 灰	灰 白	精 良	龍泉窯系
260	青磁 椀	口縁～ 体部	Ⅱ区下層				施 釉	施 釉	淡緑灰	淡緑灰	精 良	龍泉窯系
261	青磁 椀		Ⅰ区下層				施 釉	施 釉	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	精 良	龍泉窯系
262	青磁 椀	口縁部	Ⅱ区下層9 ～10ライン				施 釉	施 釉	灰オリー ブ	灰オリー ブ	精 良	龍泉窯系
263	青磁 椀	体部～ 底部	Ⅱ区排土中		5.2		施釉・蓮弁文	施釉・蓮弁文	明緑灰	明緑灰	精 良	龍泉窯系
264	青磁 椀	体部～ 底部	Ⅱ区下層		3.5		施釉・蓮弁文	施釉・蓮弁文	淡 緑 黄 灰	淡 緑 黄 灰	精 良	龍泉窯系
265	青磁 椀	体部～ 底部	Ⅱ区下層		3.4		施釉・蓮弁文	施釉・蓮弁文	淡緑灰	淡緑灰	精 良	龍泉窯系 被熱?
266	青磁 椀	体部～ 底部	Ⅱ区下層 8～9ライン				施 釉	施 釉	にぶい 黄	にぶい 黄	精 良	龍泉窯系
267	青磁 椀	底 部 高台部	Ⅱ区下層 8～9ライン				施釉・貫入あり	施釉・貫入あり	にぶい 黄	にぶい 黄	精 良	龍泉窯系
268	青磁 椀	体部～ 底部	表 採				施釉・草木文	施釉・草木文	緑 青	緑 青	精 良	龍泉窯系
269	青磁 坏	口縁～ 体部	Ⅱ 区	11.9			施釉・鎬蓮弁文	施 釉	灰オリー ブ	灰オリー ブ	精 良	龍泉窯系
270	青磁 椀	口縁部	Ⅱ区下層9 ～10ライン				施釉・蓮弁文	施 釉	緑 灰	緑 灰	精 良	龍泉窯系
271	青磁 坏	口縁部	Ⅱ区下層9 ～10ライン				施 釉	施 釉	灰オリー ブ	灰オリー ブ	精 良	龍泉窯系
272	青磁 椀	底 部	Ⅱ区下層		5.3		施釉・ 片彫蓮華文	施釉・蓮弁文	淡緑灰	淡緑灰	精 良	龍泉窯系 被熱?
273	青磁 椀	底 部	Ⅱ区10ライ ン下層		5.0		施 釉	施釉・ 片彫蓮華文	淡緑灰	淡緑灰	精 良	龍泉窯系 被熱?
274	青磁 皿	体部～ 底部	Ⅱ区10ライ ン下層				施 釉	施釉・片彫花 文・櫛目文	灰オリー ブ	灰オリー ブ	精 良	同安窯系
275	青磁 皿	体部～ 底部	Ⅱ区排土中		3.3		施 釉	施釉・片彫花 文・櫛目文	灰オリー ブ	灰オリー ブ	精 良	同安窯系
276	青磁 皿	底 部	Ⅱ区下層		4.6		施釉・露胎	施 釉	淡 明 緑 灰	淡 明 緑 灰	精 良	龍泉窯系
277	青磁 水注	頸 部	Ⅰ区下層				施 釉	施 釉	灰オリー ブ	灰 白	精 良	龍泉窯系

第8表 畑田遺跡 出土遺物観察表(陶磁器)⑧

遺物 番号	器種	部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の 特徴	分類
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
278	白磁 椀	口縁部	Ⅱ区下層				施釉・ 玉縁状口縁	施釉	灰白	灰白	精良	白磁
279	白磁 椀	口縁部	Ⅱ区下層				施釉	施釉	灰白	灰白	精良	白磁
280	白磁 椀	体部	Ⅰ区下2層 7~8ライン				施釉・貫入あり	施釉・貫入あり	灰白	灰白	精良	白磁
281	白磁 椀	体部~ 底部	Ⅱ区下層		4.4		施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	精良	白磁
282	白磁 皿	底部	Ⅱ区下層		3.7		施釉・貫入あ り・露胎	施釉・貫入あり	灰白	灰白	精良	白磁・ 被熱?
283	白磁 壺?	底部	Ⅱ区下層 8~9ライン		8.0		施釉・露胎	施釉	明灰・灰	明灰	精良	白磁
284	白磁 水注	胴部	Ⅱ区下層 8~9ライン				施釉	施釉	灰白	灰白	精良	白磁・ 被熱?
285	青白磁 壺	肩部	Ⅱ区下層				施釉	施釉	淡緑灰	淡緑灰	精良	286と同一 個体
286	青白磁 壺	肩部	Ⅰ区下層				回転横ナデ・ 施釉	回転横ナデ・ 施釉	淡緑灰	淡緑灰	精良	285と同一 個体
287	青白磁 壺	不明	不明				施釉	施釉	淡緑灰	淡緑灰	精良	286同一 個体
288	磁器 皿か椀	口縁部	Ⅰ区下層				施釉・染付・ 碁笥底	施釉・染付	明オリ ブ灰	灰白	精良	景德鎮
289	磁器 皿か椀	口縁部	Ⅰ区下層				施釉・染付	施釉	灰白	灰白	精良	景德鎮
290	染付 椀	体部	Ⅱ区下層				施釉・染付	施釉	灰白	灰白	精良	染付
291	滑石製 石鍋	口縁部	Ⅱ区下層9 ~10ライン	23.7			ケズリ	ケズリ	灰	灰黄褐	—	石鍋
292	滑石製 石鍋	口縁~ 胴部	Ⅱ区下層9 ~10ライン	26.8			ケズリ	ケズリ	明褐	明褐	—	石鍋
293	瓦質土 器鉢	口縁部	Ⅱ区下層 8~9ライン				横方向のナデ	横方向のナデ	灰	灰	精良	洗? 火鉢?
294	瓦質土 器鉢	胴部~ 底部	Ⅱ区				横方向のナデ	横方向のナデ・ 一部ミガキ?	灰	灰	精良	洗? 火鉢?

第9表 畑田遺跡 出土遺物観察表 (陶磁器・その他) ⑨

第5節 畑田遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. 畑田遺跡のテフラ分析

1. はじめに

宮崎県中南部の火山灰土中には、霧島火山や桜島火山などから噴出したテフラが認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡において求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、年代の不明な土層が認められた畑田遺跡においても、地質調査を行って土層の記載を行うとともに、屈折率測定を行って示標テフラとの同定を行い、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は基本土層断面である。

2. 基本土層断面の土層層序

基本土層断面では、下位より黄白色軽石混じり灰色砂質土（層厚2 cm以上）、鉄分が濃集した灰褐色土（層厚4 cm）、灰色砂質火山灰層のブロックを含む灰白色軽石層（層厚16 cm、軽石の最大径6 mm、石質岩片の最大径2 mm）、下位の灰白色軽石層に由来する軽石を含む暗褐色土（層厚12 cm、軽石の最大径6 mm）、黄白色および灰白色軽石に富む暗灰色土（層厚6 cm、軽石の最大径11 mm）、灰色砂質土（層厚19 cm）、砂混じりで若干黄色を帯びた灰色土（層厚8 cm）、黄白色軽石混じり灰色土（層厚10 cm、軽石の最大径18 mm）、砂混じり灰色土（層厚17 cm）が認められる（図1）。

これらのうち、黄白色軽石については、岩相から約4,200年前に霧島火山御池火口から噴出した霧島御池軽石（Kr-M、町田・新井，1992，早田，1997）に由来すると考えられる。

3. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

基本土層断面で認められた軽石層（試料番号1）の起源を明らかにするために、屈折率測定を行って示標テフラとの同定を試みた。測定は、温度一定型位相差法（新井，1972）による。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表1に示す。試料番号9には、比較的よく発泡した灰白色軽石（最大径6 mm）が多く含まれている。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。火山ガラス（ n ）と斜方輝石（ γ ）の屈折率は、各々1.510-1.515と1.710-1.715である。このテフラは、その特徴から、1471（文明3）年に桜島火山から噴出したと考えられている桜島3テフラ（Sz-3、小林，1986，町田・新井，1992）に同定される。ただし、層相からテフラ層自体は何らかの作用により攪乱を受けていると考えられる。

4. 小結

畑田遺跡の基本土層断面について、地質調査と屈折率測定を行った。その結果、桜島3テフラ（Sz-3，1471年）を認めることができた。

【文 献】

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究， 11， p.254—269.

小林哲夫（1986）桜島火山の形成史と火砕流．文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火砕流等）の特質と災害」（研究代表者 荒牧重雄）， p.137—163.

町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会， 276 p.

早田 勉（1997）火山灰と土壤の形成．宮崎県史通史編1， p.33—77.

表1 畑田遺跡基本土層断面における屈折率測定結果

試料	重鉱物	火山ガラス (n)	斜方輝石 (γ)
1	opx > cpx	1.510—1.515	1.710—1.715

opx：斜方輝石， cpx：単斜輝石． 屈折率の測定は温度一定型位相差法（新井， 1972）による。

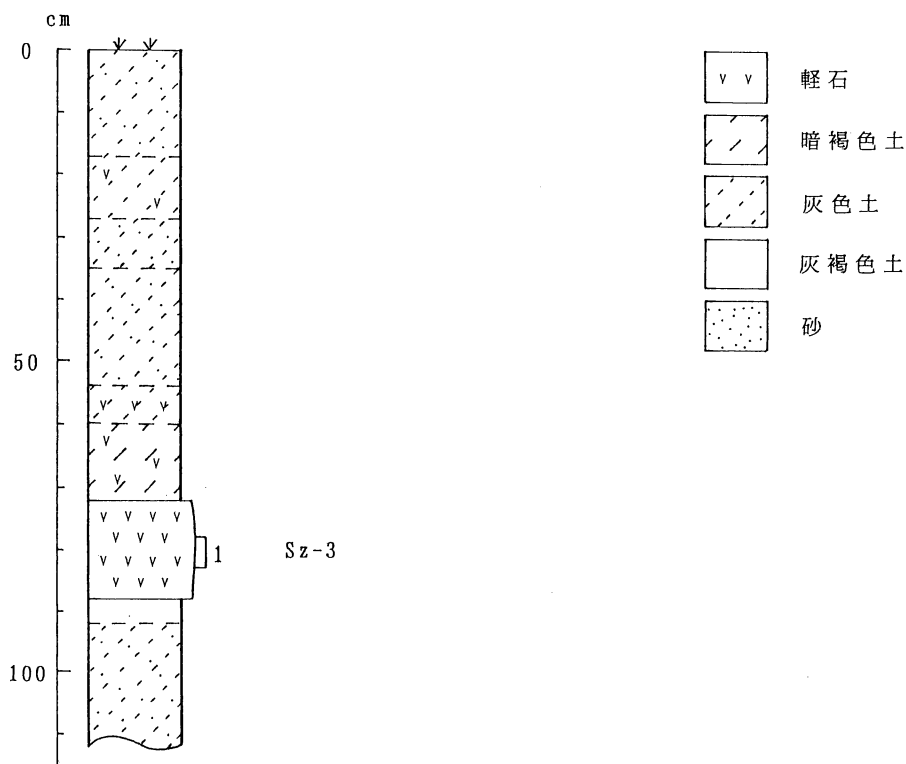


図1 畑田遺跡基本土層断面の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

2. 畑田遺跡におけるプラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、おもにイネ科植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 1987)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。畑田遺跡の発掘調査では、桜島3テフラ (Sz-3, 1471年) 直下から水田遺構が検出された。ここでは、同遺構における稲作の検証およびその他の層における稲作の検討を主目的として分析を行った。

2. 試料

分析試料は、基本土層地点で採取された11点、8C地点で採取された4点、9層検出面で採取された10点、13層検出面で採取された4点、14層検出面で採取された5点の計34点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10⁻⁵g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属 (チシマザサ節・チマキザサ節) は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、表2および図1～図3に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、9層検出面、13層検出面、14層検出面の試料については、水田跡の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な5分類群に限定した。

〔イネ科〕機動細胞由来：イネ、キビ族型、ジュズダマ属、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）類の表皮細胞由来：イネ、オオムギ族（ムギ類）

〔イネ科－タケ亜科〕メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科－その他〕表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来であるがカヤツリグサ科やシダ類でも形成される）、未分類等

〔樹木〕ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

5. 考 察

(1) 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、宮崎県内では密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 基本土層地点（図1）

Sz-3混の7層（試料1）から約180cm深の16層（試料9）までの層準について分析を行った。その結果、全ての試料からイネが検出された。このうち、7層（試料1）、10層（試料3）、13層（試料6）では密度が10,000個/g前後とかなり高い値であり、他の層でも5,000個以上と高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) 8C地点（図2）

中世遺物包含層とされる14層（試料1）から古墳時代とされる17層（試料4）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、15層（試料2）と17層（試料3、4）では密度が5,000個/g以上と高い値であり、14層（試料1）でも4,400個/gと比較的高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

3) 9層検出面（図3）

水田遺構が確認されたSz-3直下の9層検出面では、調査区の北端（試料1）から南端（試料19）

にかけてほぼ等間隔に採取された10点について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。密度は3,100~6,000個/g (平均4,500個/g) と高い値である。したがって、同検出面では調査区のほぼ全域で稲作が行われていたものと考えられる。

4) 13層検出面 (図3)

13層検出面では、調査区中央部付近から採取された試料1、3、5、7の4点について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネが検出された。密度は2,300~3,800個/g (平均2,900個/g) と比較的高い値である。したがって、同検出面では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

5) 14層検出面 (図3)

中世遺物包含層とされる14層検出面では、調査区中央部付近から採取された試料1、3、5、7、9の5点について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネが検出された。密度は2,200~4,500個/g (平均2,900個/g) と比較的高い値である。したがって、同検出面では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) イネ苗について

Sz-3直下の9層から検出されたイネの植物珪酸体の中には、縦長が30 μ m前後と明らかに小型で、形状が未熟なものや縦長に対する横長の比率が大きいものが比較的多く認められた (写真No3参照)。これは生育段階初期 (苗の段階) のイネに特有のものである (能登ほか, 1989, 杉山, 1998)。

このことから、Sz-3直下の水田面にはイネ苗が生育していたと考えられ、田植え直後の状況であったものと推定される。

(3) 稲粃の生産総量の推定

Sz-3直下の9層水田跡について、そこで生産された稲粃の総量を算出した (層厚を10cmと仮定)。その結果、面積10a (1,000 m^2) あたり4,600kgと算出された。当時の稲粃の年間生産量を面積10aあたり100kgとすると、同層ではおよそ46年間にわたって稲作が営まれていたものと推定される。ただし、これらの値は収穫が穂刈りで行われ、稲わらがすべて水田内に還元されたと仮定して算出しているため、収穫が株刈りで行われて水田から持ち出された場合は、その割合に応じて修正を行う必要がある。

(4) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族 (ムギ類が含まれる)、ヒエ属型 (ヒエが含まれる)、エノコログサ属型 (アワが含まれる)、ジュズダマ属 (ハトムギが含まれる)、オヒシバ属型 (シコクビエが含まれる)、モロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはオオムギ族が検出された。

オオムギ族 (穎の表皮細胞) は、8C地点の中世遺物包含層とされる14層 (試料1) から検出された。ここで検出されたのは、ムギ類 (コムギやオオムギなど) と見られる形態のもの (杉山・石井, 1989) である。密度は1,000個/g未満と低い値であるが、穎 (粃殻) は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

(5) 堆積環境の推定

上記以外の分類群では、全体的に棒状珪酸体が多量に検出され、ネザサ節型やメダケ節型などのタケ亜科、ススキ属型、ウシクサ族Aなども検出された。また、ヨシ属も部分的に少量検出された。さらに、ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などの樹木起源も少量検出された。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にイネが卓越しており、その他の分類群は比較的少量であることが分かる。

以上の結果から、古墳時代と見られる17層からSz-3（1471年）直下の9層にかけては、集約的な水田稲作が継続して行われていたと考えられ、遺跡周辺にはススキ属やチガヤ属、ネザサ節やメダケ節などの竹笹類、およびシイ属やスノキ科などの照葉樹林が分布していたものと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、水田遺構が検出された桜島3テフラ（Sz-3, 1471年）直下検出面（9層）では、分析を行ったすべての試料からイネが多量に検出され、同遺構で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、10層～17層の各層でもイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

古墳時代と見られる17層からSz-3直下の9層にかけては、集約的な水田稲作が継続して行われていたものと考えられ、遺跡周辺にはススキ属やチガヤ属、ネザサ節やメダケ節などの竹笹類、およびシイ属やスノキ科などの照葉樹林が分布していたものと推定される。

【文 献】

- 杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第2号，p.27-37．
- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83．
- 杉山真二・石井克己（1989）群馬県子持村、F P直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析．日本第四紀学会要旨集，19，p.94-95．
- 杉山真二（1998）イネ苗の植物珪酸体とその応用—水田埋没の季節推定—．日本文化財科学会第15回大会研究発表要旨集，92-93．
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—．考古学と自然科学，9，p.15-29．
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—．考古学と自然科学，17，p.73-85．

表1 宮崎県、畑田遺跡における植物珪酸体分析結果
 検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	地点・試料														
	8 C					基本土層									
	1	2	3	4	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科	44	52	74	58	101	74	56	92	66	59	88	56	67	36	60
Gramineae (Grasses)															
<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)				7											
Rice husk Phytolith															
イネ籾殻(穎の表皮細胞)															
オオムギ族(穎の表皮細胞)															
キビ族型															
Panicaceae type															
ヨシ属															
<i>Phragmites</i> (reed)															
ススキ属型															
<i>Miscanthus</i> type															
ウシクサ族 A															
ウシクサ族 A type															
Andropogoneae A type															
タケ亜科															
Bambusoideae (Bamboo)															
メダケ節型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Medake</i>															
メダケ節型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Medake</i>															
ネササ節型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Nezasa</i>															
クマササ節型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>															
ミヤコササ節型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>															
マダケ節型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Medake</i>															
メダケ節型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Medake</i>															
ネササ節型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Nezasa</i>															
クマササ節型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>															
ミヤコササ節型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>															
マダケ属型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Medake</i>															
メダケ属型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Medake</i>															
ネササ属型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Nezasa</i>															
クマササ属型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>															
ミヤコササ属型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>															
未分類等															
その他のイネ科															
表皮毛起源															
棒状珪酸体															
未分類等															
樹木起源															
Arboreal															
ブナ科(シイ属)															
<i>Castanopsis</i>															
クスノキ科															
Lauraceae															
マンサク科(イスノキ属)															
<i>Disyllum</i>															
多角形板状(コナラ属など)															
Polygonal plate shaped (<i>Quercus</i>)															
その他															
Others															
植物珪酸体総数	1118	764	1191	923	1964	1979	1468	1646	1265	1938	1505	1440	1337	1297	1424

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	1.31	1.54	2.17	1.70	2.98	2.19	1.64	2.71	1.95	1.75	2.59	1.64	1.96	1.07	1.75
<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)															
ヨシ属	0.47	0.47	0.09	0.46	0.27	0.46	0.17	0.16	0.36	0.18	0.18	0.17	0.37	0.81	0.09
<i>Phragmites</i> (reed)															
ススキ属型	0.46	0.37	0.09	0.27	0.08	0.26	0.08	0.16	0.26	0.26	0.17	0.09	0.09	0.08	0.25
<i>Miscanthus</i> type															
メダケ節型	0.26	0.09	0.07	0.08	0.07	0.32	0.37	0.51	0.28	0.46	0.11	0.10	0.07	0.03	0.25
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Medake</i>															
ネササ節型	0.14	0.11	0.07	0.07	0.16	0.39	0.05	0.05	0.06	0.17	0.06	0.16	0.06	0.22	0.06
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Nezasa</i>															
クマササ属型	0.17	0.06	0.22	0.16	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.22	0.06
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>															
ミヤコササ節型															
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>															

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	45	35	35	27	29	26	16	19	43	28	51	40	25	82
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Medake</i>														
ネササ節型	25	43	24	22	57	32	73	72	48	51	32	39	33	10
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Nezasa</i>														
クマササ属型	29	22	76	51	14	39	10	6	9	18	17	61	26	65
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>														
ミヤコササ節型														
<i>Pleiochloa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>														

表2 宮崎県、畑田遺跡におけるプラント・オパール分析結果
 検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料									
		9層検出面 (Sz-3直下)									
		1	3	5	7	9	11	13	15	17	19
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	45	38	60	38	45	45	53	37	53	31
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)								22		
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	23	8	23	31	15	8	30	15	8	8
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	279	192	189	92	165	128	113	52	45	69

推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.33	1.13	1.78	1.13	1.32	1.33	1.56	1.10	1.56	0.90
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)								1.42		
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.28	0.10	0.28	0.38	0.19	0.09	0.37	0.19	0.09	0.09
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	1.34	0.92	0.91	0.44	0.79	0.61	0.54	0.25	0.22	0.33

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	13層検出面				14層検出面				
		1	3	5	7	1	3	5	7	9
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	38	30	23	23	23	22	38	45	15
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)			8	23	8	7			15
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	8	45	30	23	15	22	15	8	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	23	68	30	15	60	37	30	60	67

推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.10	0.89	0.67	0.67	0.66	0.66	1.11	1.33	0.44
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)			0.48	1.44	0.47	0.47			0.95
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.09	0.56	0.38	0.28	0.19	0.28	0.19	0.09	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.11	0.33	0.15	0.07	0.29	0.18	0.15	0.29	0.32

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

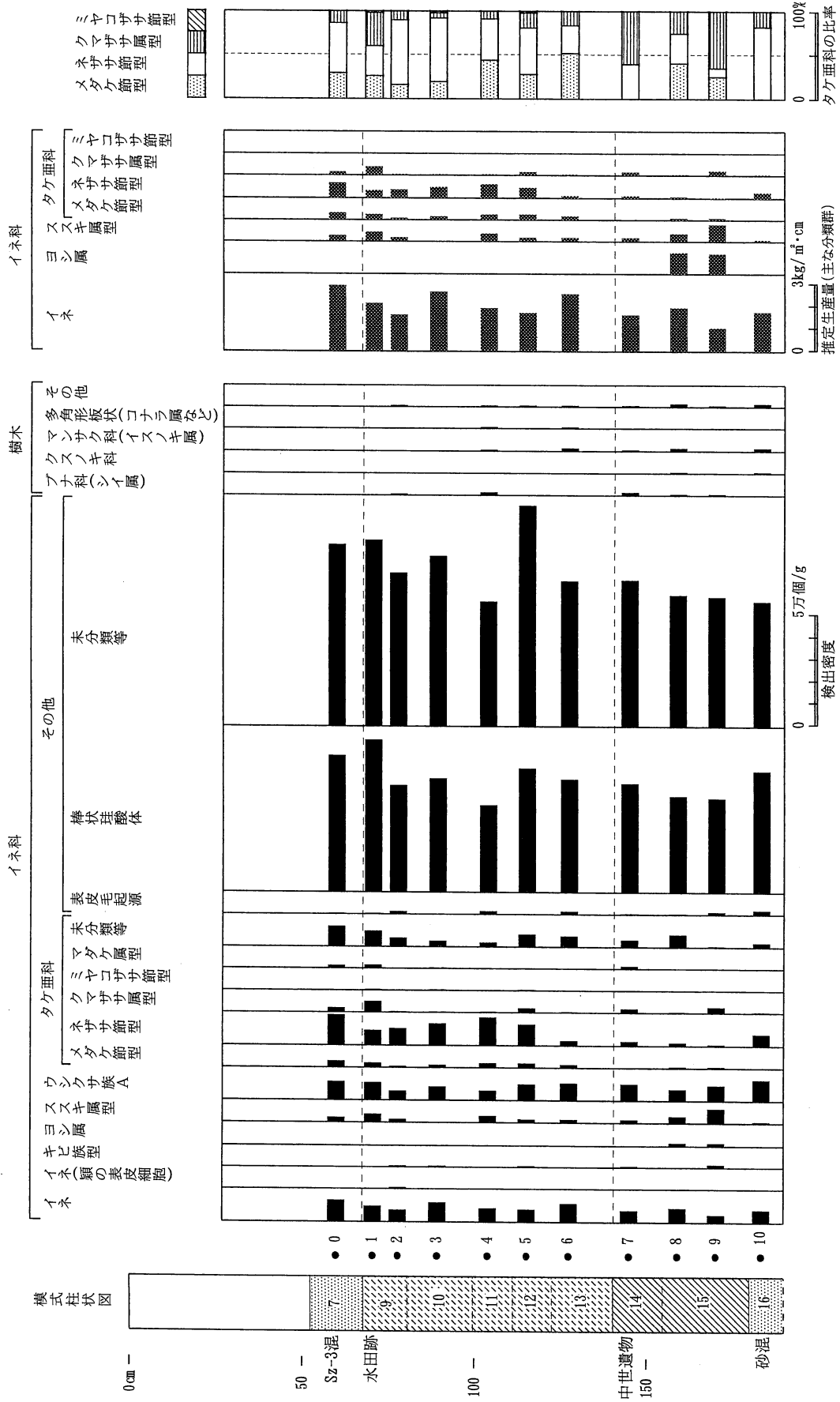


図1 畑田遺跡、基本土層における植物珪酸体（プラント・オパール）分析結果

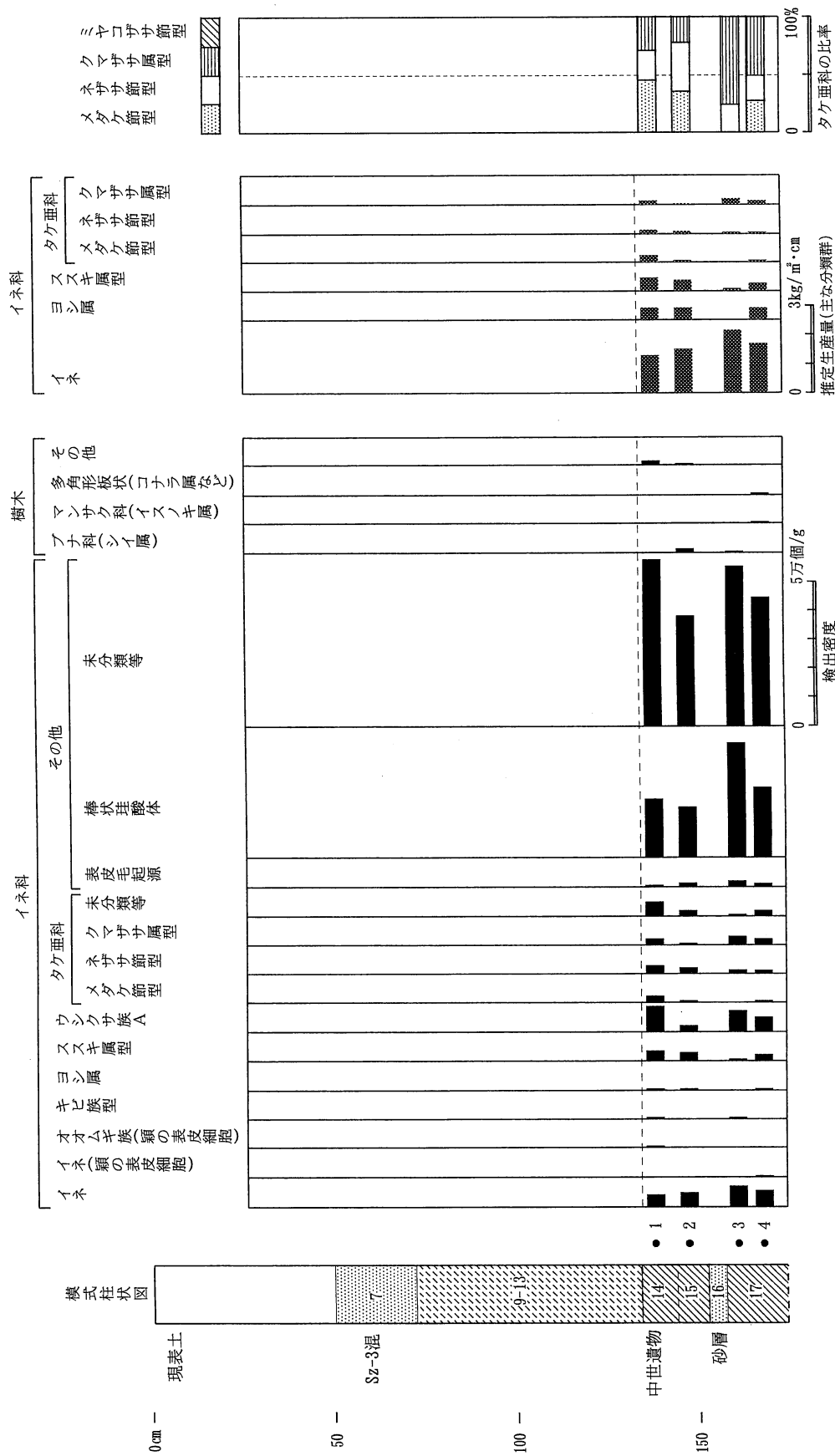


図2 畑田遺跡、8C地点における植物珪酸体(アラント・オバール)分析結果

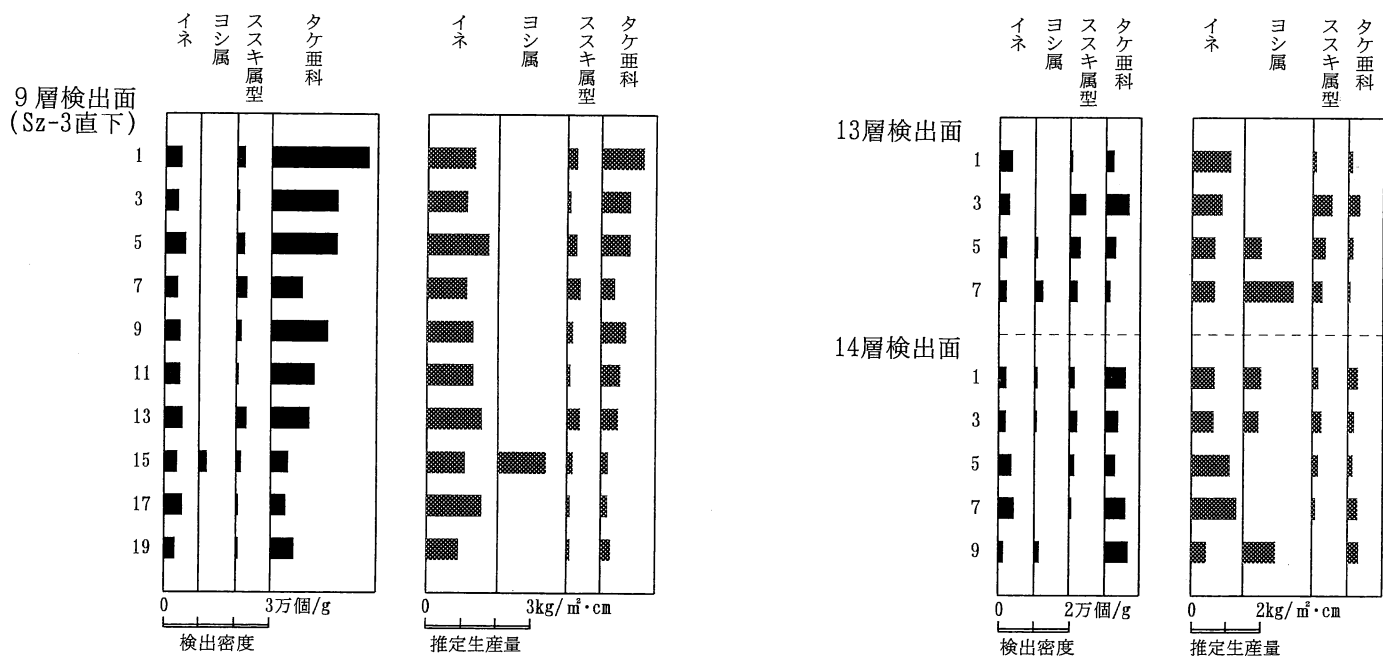
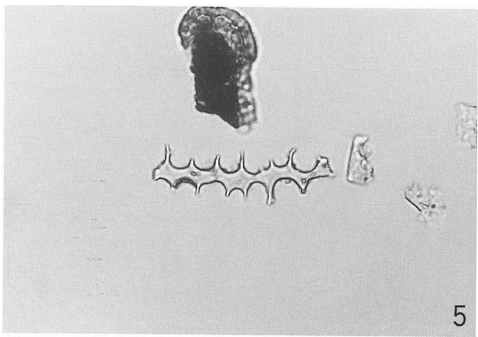
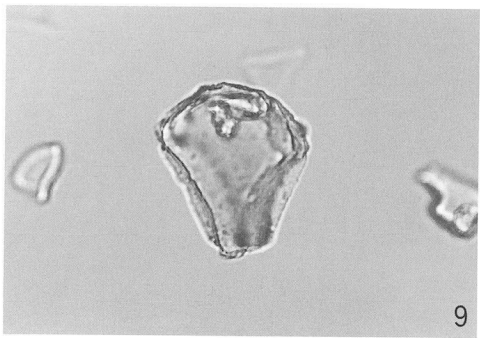
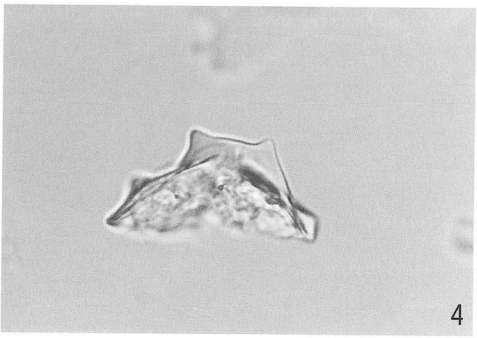
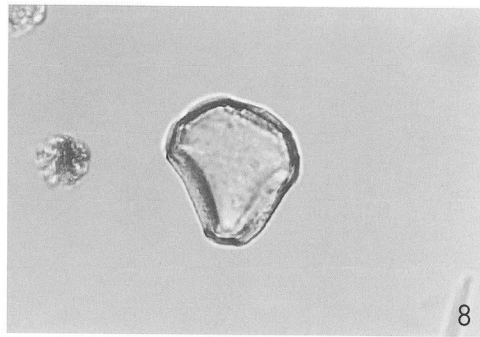
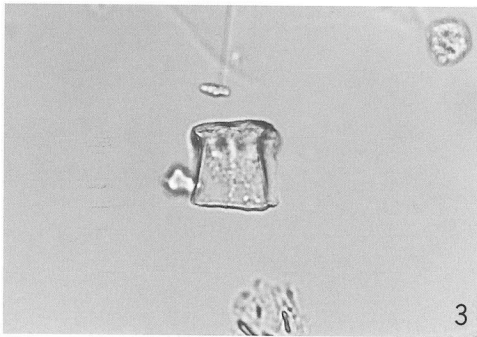
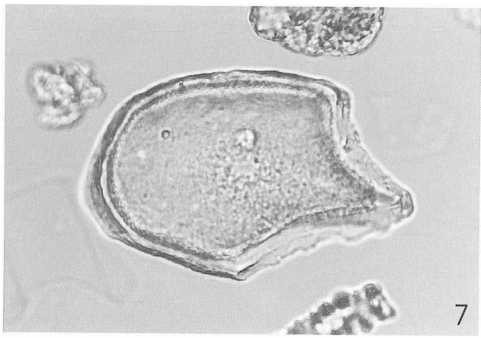
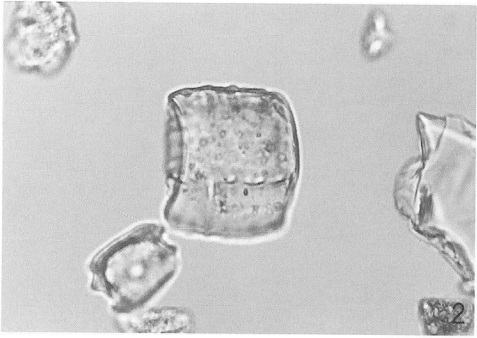
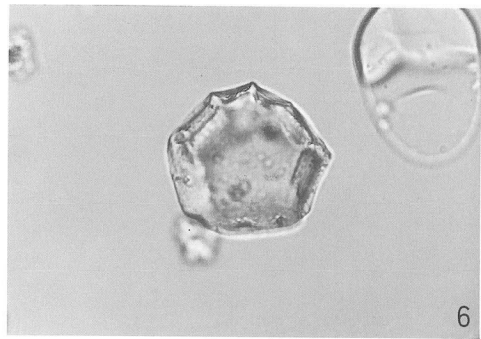
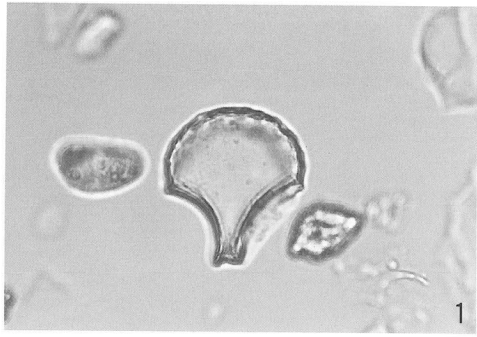


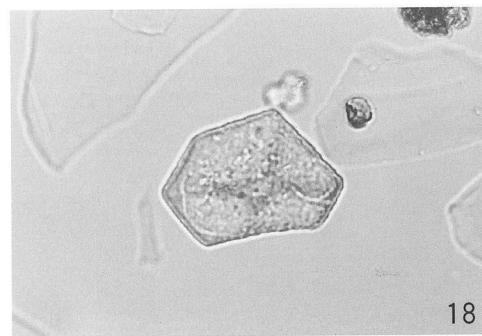
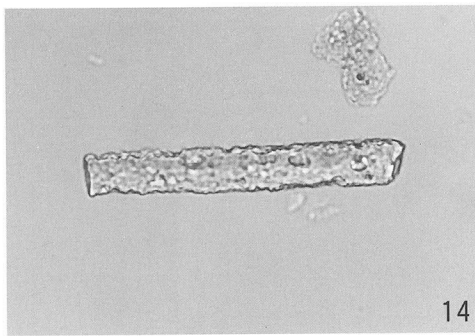
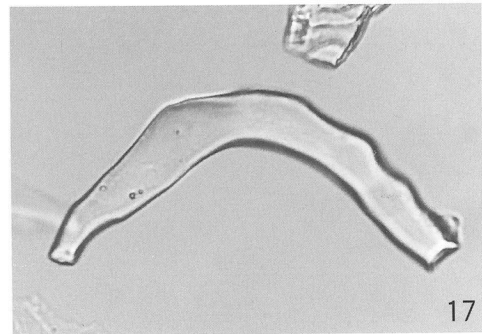
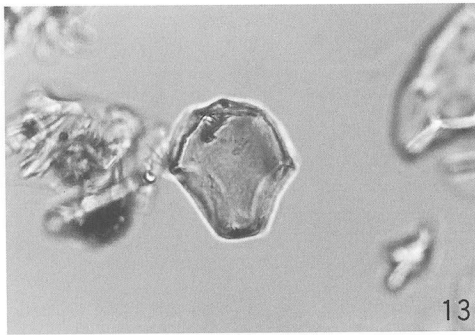
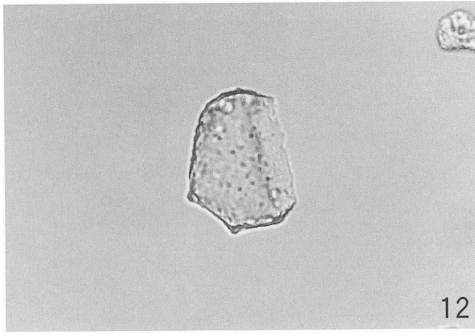
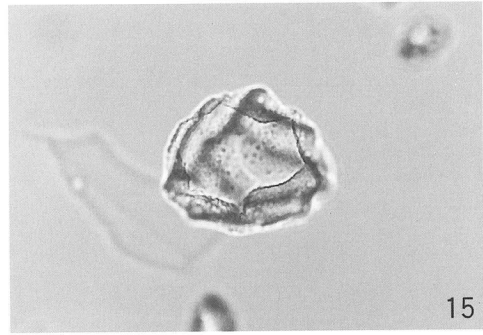
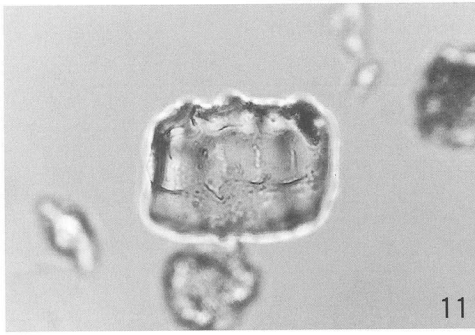
図3 畑田遺跡の遺構検出面におけるプラント・オパール分析結果

植物珪酸体の顕微鏡写真

(倍率はすべて400倍)

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	基本土層	1
2	イネ (側面)	基本土層	7
3	イネ (苗)	基本土層	1
4	イネの籾殻 (穎の表皮細胞)	14層検出面	9
5	オオムギ族 (穎の表皮細胞)	8C地点	1
6	ジュズダマ属	14層検出面	9
7	ヨシ属	9層検出面	15
8	ススキ属型	9層検出面	13
9	メダケ節型	9層検出面	11
10	ネザサ節型	13層検出面	3
11	ネザサ節型	14層検出面	3
12	クマザサ属型	13層検出面	3
13	マダケ属型	9層検出面	9
14	棒状珪酸体	9層検出面	7
15	ブナ科 (シイ属)	14層検出面	1
16	クスノキ科	14層検出面	1
17	マンサク科 (イスノキ属)	8C地点	4
18	多角形板状 (コナラ属など)	9層検出面	13





第7節 まとめ

畑田遺跡では、基本層序の第V層より中世の水田跡が、第VI層以下の包含層より多量の中世遺物が検出された。本節では、主に水田跡遺構と中世遺物包含層について、若干ではあるが記述を行いまとめたい。

1. 母智丘谷遺跡・畑田遺跡の中世水田遺構について

(1) 検出された水田遺構

母智丘谷遺跡・畑田遺跡からは、ともに15世紀後半降灰と考えられている桜島文明軽石（通称「白ボラ」もしくは「文明ボラ」）に覆われた水田跡遺構が検出された。宮崎県下、特に都城市内において、同様に桜島文明軽石に覆われた水田跡遺構が嫁坂遺跡（本報告の第V章）・鶴喰遺跡（母智丘谷遺跡より直線距離で約300m）・肱穴遺跡（母智丘谷遺跡より直線距離で約1,500m）などでも確認されている。

母智丘谷・畑田の両遺跡は、ほぼ隣接する場所に位置し、一連の水田地帯を形成していたと考えられる。両遺跡の比較をすると、母智丘谷遺跡が水田面積平均66㎡・平均畦畔長6.3mである（第Ⅲ章 第5節 第1表・第2表参照）ことに對し、畑田遺跡は、下表が示すように、水田面積平均67㎡・平均畦畔長10.1mと比較的同じ水田規模である。しかし、平面プランは、直線的な畦畔によって方形を意識した区割りを用いている母智丘谷遺跡に對し、畑田遺跡は高低差2mの地形に合わせた曲線的な畦畔によって棚田状の不定型な区割りを用いている。これは、部分的な調査のため全容が把握できていないが、同じ集団が営んでいたと考えられる母智丘谷・畑田両遺跡の水田跡が、それぞれ自然地形を最大限に利用して造られた水田であるといえる。

	長径 (m)	短径 (m)	面積 (㎡)	長径方位	レベル (m)
水田区画 1	17.9	4.5	112	N-34°-W	149.6
水田区画 2	22.6	10.8	174	N-8°-W	149.0
水田区画 3	3.1	1.0	27	N-14°-W	148.8
水田区画 4	14.6	12.1	132	N-23°-E	148.9
水田区画 5	13.8	6.8	67	N-34°-E	148.8
水田区画 6	14.2	11.8	150	N-43°-E	148.6
水田区画 7	6.3	3.1	15	N-27°-E	148.4
水田区画 8	4.1	2.0	6	N-14°-W	148.4
水田区画 9	16.0	4.2	67	N-13°-W	147.9
水田区画 10	4.5	3.2	15	N-28°-W	147.4
水田区画 11	11.4	8.3	89	N-12°-W	147.6
水田区画 12	7.1	2.1	8	N-6°-W	147.5
水田区画 13	5.4	4.1	18	N-22°-W	149.0
平均	10.8	5.7	67.69	N-2°-W	148.45

第1表 畑田遺跡 水田区画計測表

	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	区 画 水 田	水 口
畦 畔 A	21.1	50~70	15	水田区画1・水田区画2	杭列有
畦 畔 B	5.6	50~60	20	水田区画2・水田区画4	有
畦 畔 C	13.3	60~80	15	水田区画2・水田区画3	無
畦 畔 D	12.3	30~100	10	水田区画4・水田区画5	無
畦 畔 E	14.1	40~100	15	水田区画5・水田区画6	有
畦 畔 F	12.8	40~50	5	水田区画6・水田区画7	有?
畦 畔 G	1.1	130~140	10	水田区画6・水田区画7・水田区画8	無
畦 畔 H	7.4	50~60	10	水田区画10・水田区画11	無
畦 畔 I	9.4	70~80	15	水田区画11・水田区画12	無
畦 畔 J	3.4	50~60	15	水田区画13と無耕作地帯	無
平 均	10.1	68.5	13	—	—

第2表 畑田遺跡 水田畦畔計測表

(2) 凹凸痕について

母智丘谷遺跡同様、畑田遺跡では、検出された水田面全面から平面形態幅25~40cmの隅丸方形・断面形態深さ5~10cm程度の三角形の凹凸痕が確認された。この凹凸痕は、直線状もしくは扇状に部分的に規則性をもって連続する単位が確認でき、幅25~40cmの農耕具を斜めに差し込んだ結果できた農耕具痕跡だと考えられる。この凹凸痕の単位は、直線状痕跡が直進もしくは真っ直ぐ後退しながら作業を行った痕跡で、扇状痕跡が一カ所を支点として作業を行った痕跡であると考えられる。

(3) 凹凸痕の性格について

ところで、この農耕具痕跡はどのような性格のものであるのかという疑問が残る。現段階で、この農耕具痕跡は、以下A・Bの2通りの可能性を考えることができる。

A. 桜島文明軽石降下によって一度耕作地を放棄した後、ある程度の時期をおいて耕作を再開するための第Ⅲ層水田面耕作時痕跡（以後「耕作痕」と呼称する）。

①土層堆積状況…確かに基本層序の第Ⅳ層（桜島文明軽石層）は、軽石と火山性灰質土が混入している（写真p106-①②）。テフラ分析の結果においても攪乱を受けていると判断している（第Ⅳ章 第5節-p84）。ただ、第Ⅳ層は軽石と火山性灰質土の火山降下物のみで構成されており、耕作土と火山降下物が混じることなく天地返しできるとは考えにくい。凹凸痕は、第Ⅲ層耕作時に深く入り込んだ農耕具によって、第Ⅳ層が攪乱され、その下端が第Ⅴ層に残ったと考えられる。

B. 桜島文明軽石降下直後、程なく復旧するための桜島文明軽石除去の天地返し痕跡（以後「復旧痕」と呼称する）。

①畦畔の踏襲…検出された畦畔を避けるように凹凸痕が認められる。これは畦畔を踏襲した結果だと考えられる。第Ⅳ層の層厚は15~25cm・畦畔の高さは5~20cmであり、火山降下物によって畦畔の大部分は埋もれたと考えられるが、完全には埋没していなかったと考えられる。時間が経ち、第Ⅲ層が堆積すれば、畦畔をそのまま踏襲することが難しくなる。間髪をいれず、復旧したことが想定される。

②重複しない凹凸痕…凹凸痕を図化している母智丘谷遺跡第8図（p17）や畑田遺跡第10図（p47）において、規則性をもつものは部分的ではあるが、互いの凹凸痕が著しく重複していないことが看取できる。これは、作業が一度きりの行為であったことを示すのではなからうか。第Ⅲ層の耕作痕であるならば、幾度かの耕作によって2層下の第Ⅴ層には著しく重複した凹凸痕が残るはずである。

（4）小結

このように、凹凸痕が「耕作痕」であるか「復旧痕」であるかについては、肯定材料も否定材料もあり、断言できない状況である。しかし、検出された遺構の形態とプラント・オパール分析結果（第Ⅲ章第4節・第Ⅳ章第5節）によって、この凹凸痕をもつ遺構は水田跡遺構であることはほぼ疑いのないことである。ただし、凹凸痕が残されたのは、第Ⅴ層ではなく、第Ⅲ層耕作時である。また、凹凸痕は、「耕作痕」であろうとも「復旧痕」であろうとも、耕作時の農耕具痕跡だと考えられ、当時の人々が突然襲ってきた火山災害に対して生きることを諦めず奮闘してきたことを示す痕跡であることには間違いない。

2. 出土遺物の年代観について

（1）土師器

土師器は主に坏と皿で構成される。本報告において形態分類を行ったものの、出土状況が安定せず、編年的な位置付け作業が困難である。ただ、形態分類によっていくらかの傾向が看取できる。まず、底部の切り離し方法であるが、付着物などによって不明なものを除けば、その殆どが糸切りである。宮崎県下において、糸切り底の導入は、12世紀中頃とされており（文献1）、本遺跡出土の土師器も12世紀以降だと考えられる。また、15世紀後半噴出と考えられる桜島文明軽石層下から出土していることと併せて考えると、12世紀～15世紀の範疇に入る。更に、後述しているように、共伴する陶磁器等の年代が13～14世紀中心であることから考えると13～14世紀頃に時期比定できるのではなからうか。

（2）陶器

常滑窯系陶器

甕A類（178～205）は常滑系陶器であると考えられる。口縁部形態によってa～c類に細分した。赤羽一郎氏（文献2）や中野晴久氏（文献3）の編年観に従うと、口縁部形態の差異は、編年的な差異を表し、古い順からc類→b類→a類となり13世紀後半～14世紀後半の範疇に入ると考えられる。宮崎県下における常滑焼の集成を東憲章氏（文献4）が行っている。東氏の集成によると、宮崎県内の常滑焼出土遺跡は30を上回る数だとしている。県内出土のものは、時期的には全国的な拡大と時期を同じくする13世紀後半～14世紀代のものが多く、本遺跡出土のものも県内の動勢と時期を同じくしている。

古瀬戸窯系陶器

壺C類の233・瓶子（251～253）・折縁深皿（254）は古瀬戸系陶器である。233は鉄釉・その他は灰釉である。233は、壺に分類しているが耳付きの長頸花瓶であると考えられる。251～253は、肩が張り、裾部へ向かって直線的に窄まる梅瓶形の瓶子である。いずれも器形などの特徴から、古瀬戸中期（13世紀末葉～14世紀中葉）頃の範疇に入ると考えられる。

備前系陶器

壺A類（227～229）と播鉢（240～250）は備前系陶器であると考えられる。227・229は、壺の

口縁部であり、外反した口唇部を曲げ玉縁状に成形している。228は、同じく壺の口縁部ではあるが、口唇部に若干丸みをもたしているが、大きくは外反させていない。播鉢は、口唇部を肥厚させることなく、断面形態三角形に近い形で成形している。壺A類・播鉢類は、間壁忠彦氏（文献5）の編年観に従うと、ともに備前焼編年のⅢ期、つまり14世紀前半の範疇に入ると考えられる。

（3）龍泉窯系青磁

274・275は、朽葉色の青磁であり、他の青磁と若干釉色が異なる。大宰府編年（文献6）のXIV～XV期（12世紀中葉～後半）の標識磁器である同安窯系青磁であると考えられる。その他、同安窯系同様大宰府編年のXIV～XV期に比定されるような龍泉窯系青磁（257・259）を除いて、殆どが大宰府編年のXVII～XIX期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）の範疇に入るような龍泉窯系青磁であると考えられる。

（4）滑石製石鍋

2点（291・292）出土している。2点を比べて、口縁部直下の鏝の形態などから、291の方が若干古い、2点はいずれも13世紀代～14世紀後葉頃に比定できる。

（5）小 結

畑田遺跡の第Ⅵ～Ⅷ層において出土した遺物類は、新宮城付近に集中する傾向があり、新宮城に由来するものだと考えられる。新宮城は、中世～戦国時代の館城跡である（文献7）。文献資料には、肝付兼重与党が立て籠もる新宮城を、畠山直顕方の軍勢が建武3年（1336年）頃に攻め落としたとの記録がある（文献8）。今回の調査で出土した土師器・陶磁器類は、上記に述べたとおり概ね13世紀中頃～14世紀後半に属するものが多い。遺物の出土状況は、明確な遺構などから出土したのではなく、周辺に雑多に廃棄されたような印象を受ける。出土状況・下限時期・被熱した磁器類などと併せて考えると、文献に出てくる新宮城落城時期の頃と部分的に重なり関連が想定されるが、特定する証拠もなく推測の域を出ない。それよりも14世紀後半に比定されるような遺物があるということは、むしろ、落城後にも新宮城が使用されていたことを示すのではなかろうか。

このように、母智丘谷遺跡・畑田遺跡において、13～14世紀の土師器・陶磁器類の集中や15世紀後半前後の水田跡が検出された。今回の調査では、時期が異なるものの中世の生産遺構と遺物から、当時の生活の一端を垣間見ることができたのは一つの成果といえるが、どちらもどのような性格をもつものか詳しいところまで言及することができず、多くの課題が残ってしまった。今後調査例の増加によって、今回残った課題が解決されることを期待したい。

【引用参考文献】（敬省略）

- 文献1 岡本武憲 1995 「Ⅱ各地の土器様相 九州南部」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社
- 文献2 赤羽一郎 1984 『常滑焼』考古学ライブラリー 23 ニュー・サイエンス社
- 文献3 中野晴久 1995 「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館
- 文献4 東 憲章 1994 「宮崎県出土常滑焼集成」『宮崎考古』第13号 宮崎考古学会
- 文献5 間壁忠彦 1991 『備前焼』考古学ライブラリー 60 ニュー・サイエンス社
- 文献6 大宰府市教育委員会 200 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』大宰府市の文化財第49集
- 文献7 都城市教育委員会 1998 『都城市の中世城館』都城市文化財調査報告書第45集
- 文献8 都城市 2001 『都城市史』史料編 古代・中世



畑田遺跡全景①（北東方向を望む 右側は新宮城・奥の台地は月野原台地）



畑田遺跡全景②（南東方向の都城市街地を望む 左右に横切るのは横市川）



畑田遺跡 第IV層上面遺構検出状況



畑田遺跡 第V層遺構完掘状況



①水田区画 1 ~ 4



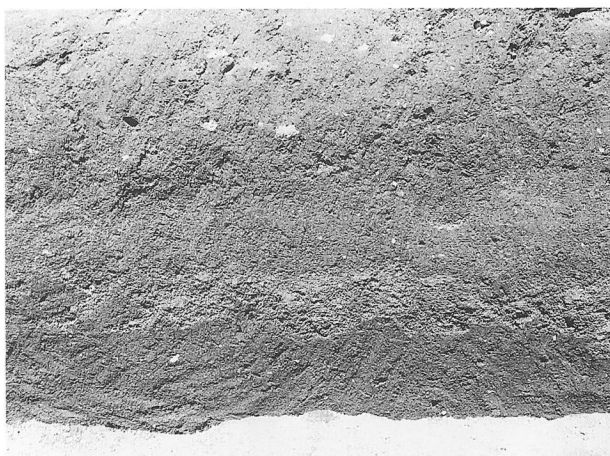
②水田区画 3 ~ 8



③水田区画 6 ~ 12



④水田区画 10 ~ 12



①土層断面図①



①土層断面図②



③畦畔Aと杭列



④畦畔Aと段差1



⑤畦畔E (検出時)



⑥畦畔B・C (検出時)



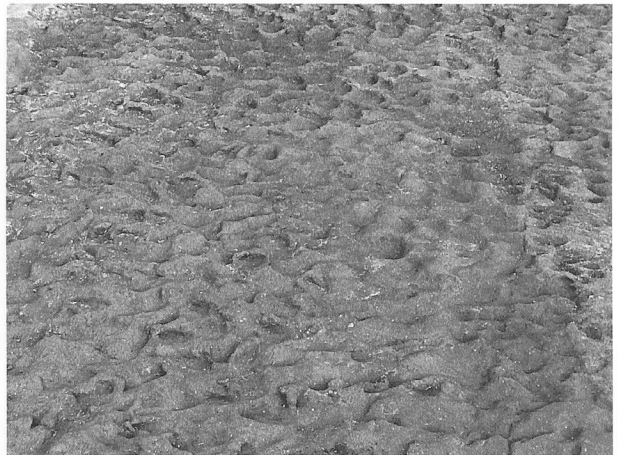
⑦畦畔D (完掘時)



⑧水田凹凸痕



①畦畔Lと水田区画13



②水田区画凹凸痕



③第VI～VIII層検出状況（上から）



④第VI～VIII層検出状況（南東から）



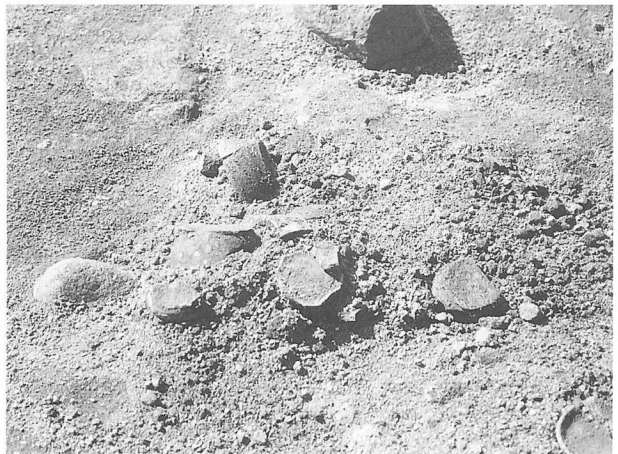
⑤土層堆積状況（Eライン）



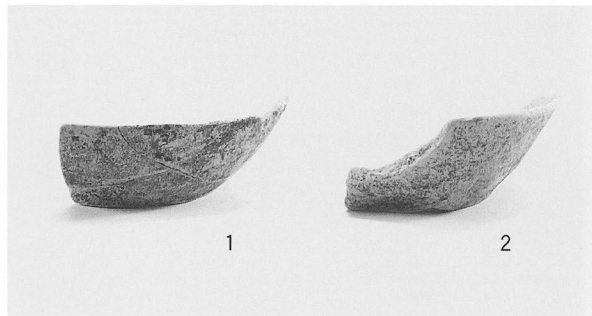
⑥土層堆積状況（Fライン）



⑦第VI～VIII層遺物出土状況①



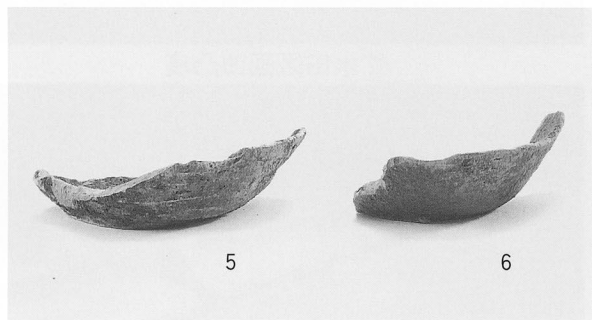
⑧第VI～VIII層遺物出土状況②



①出土土師器坏 (第I類)



⑥出土土師器坏 (第IV類)



②出土土師器坏 (第II類)



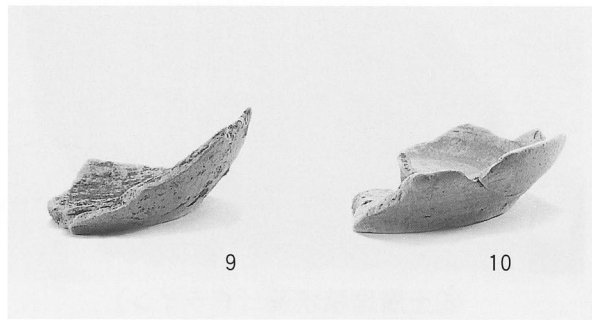
⑦出土土師器坏 (第V類)



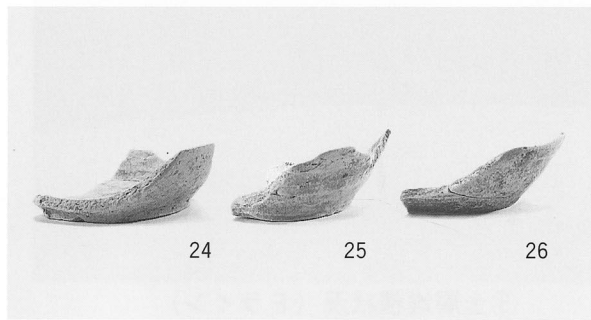
③出土土師器坏 (第II類)



⑧出土土師器坏 (第V類)



④出土土師器坏 (第III類)



⑨出土土師器坏 (第V類)



⑤出土土師器坏 (第III類)



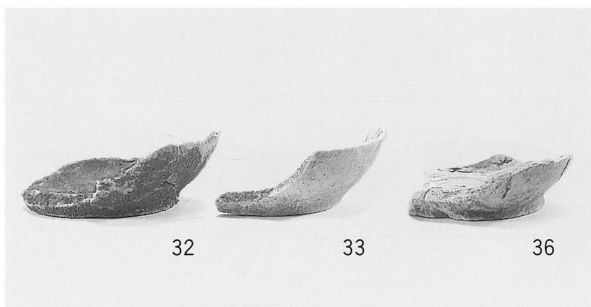
⑩出土土師器坏 (第VI類)



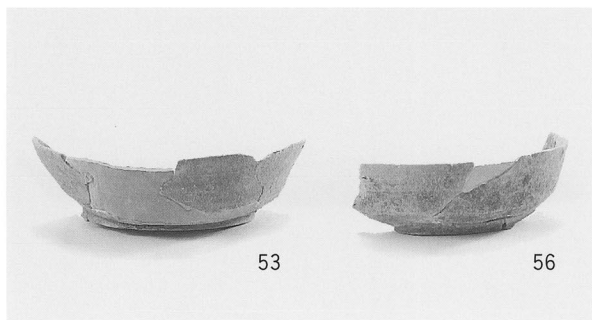
①出土土師器坏 (第VI類)



⑥出土土師器坏 (第VIII類 墨書土器)



②出土土師器坏 (第VI類)



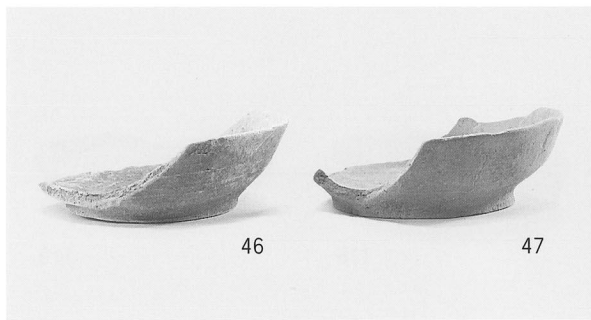
⑦出土土師器坏 (第VIII類)



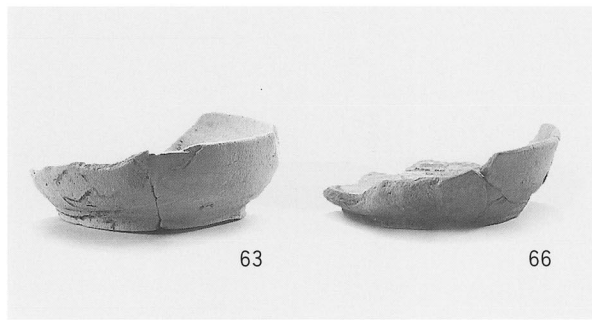
③出土土師器坏 (第VII類)



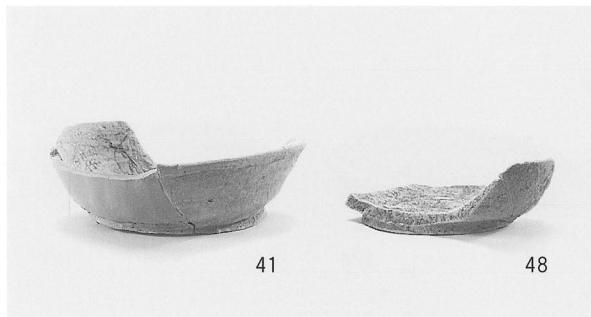
⑧出土土師器坏 (第IX類)



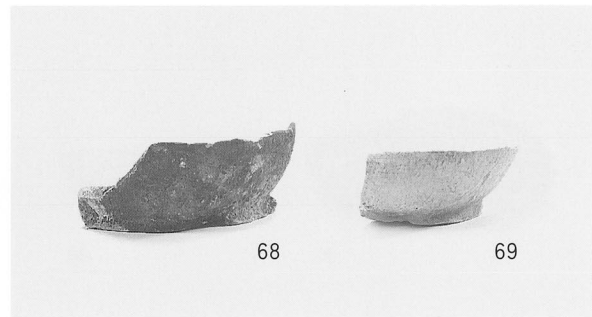
④出土土師器坏 (第VII類)



⑨出土土師器坏 (第IX類)



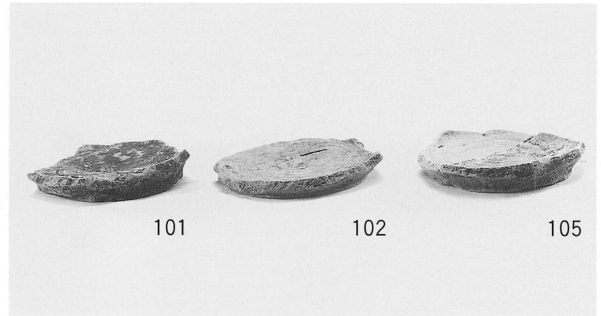
⑤出土土師器坏 (第VII類)



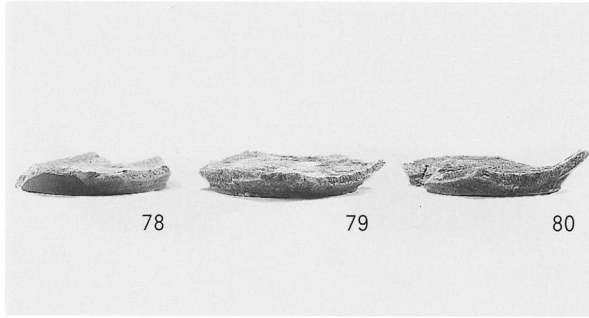
⑩出土土師器坏 (第X類)



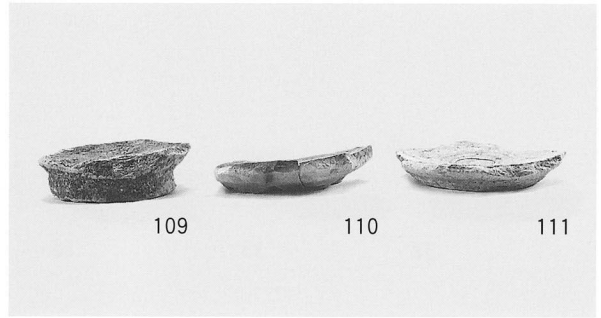
①出土土師器坏 (第XI類)



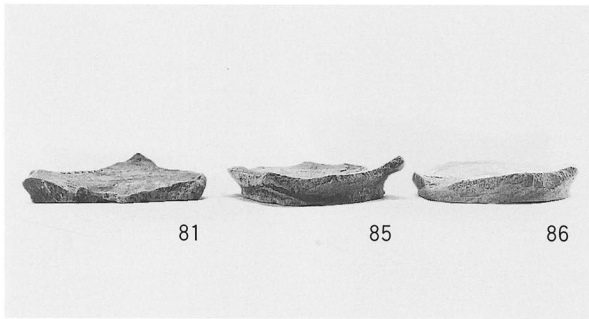
⑥出土土師器坏 (第XIII類)



②出土土師器坏 (第XI類)



⑦出土土師器坏 (第XIV類)



③出土土師器坏 (第XII類)



⑧出土土師器坏 (第XIV類)



④出土土師器坏 (第XII類)



⑨出土土師器皿 (第I類)



⑤出土土師器坏 (第XII類 穿孔のある土器)



⑩出土土師器皿 (第II類)



①出土土師器皿 (第II類)



⑥出土土師器皿 (第VI類)



②出土土師器皿 (第III類)



⑦出土土師器皿 (第VI類)



③出土土師器皿 (第III類)



⑧出土土師器皿 (第VII類)



④出土土師器皿 (第IV類)



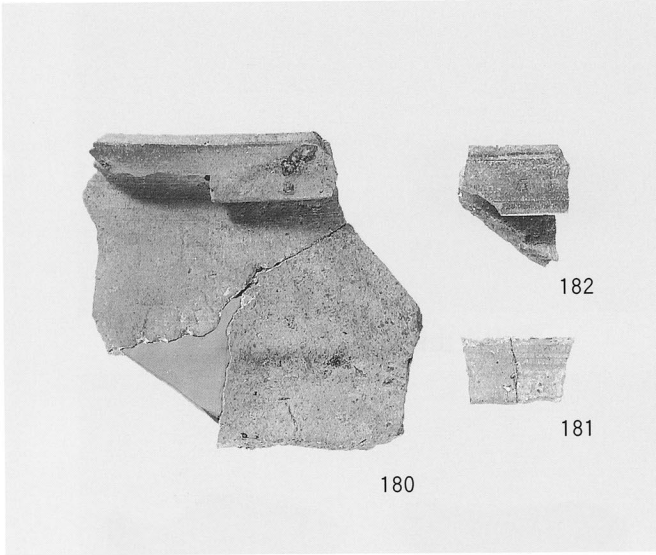
⑨出土土師器皿 (第VIII類)



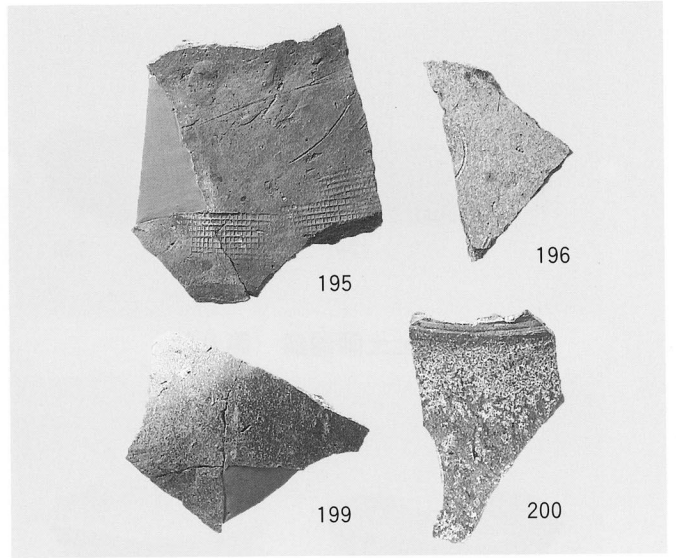
⑤出土土師器皿 (第V類)



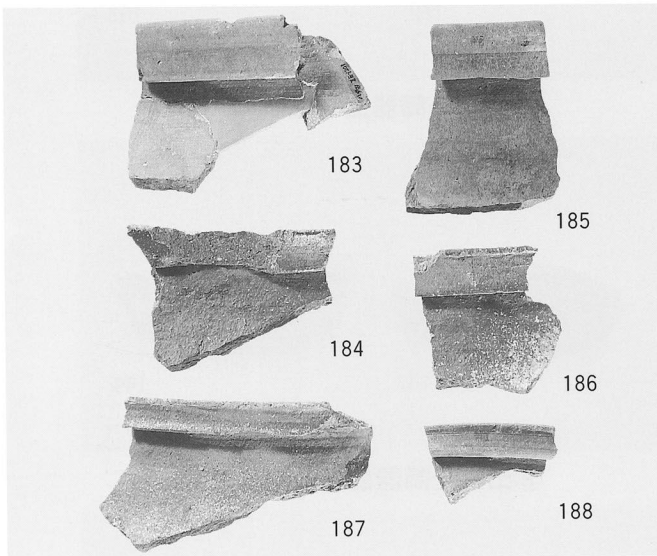
⑩出土土師器皿 (第VIII・IX類)



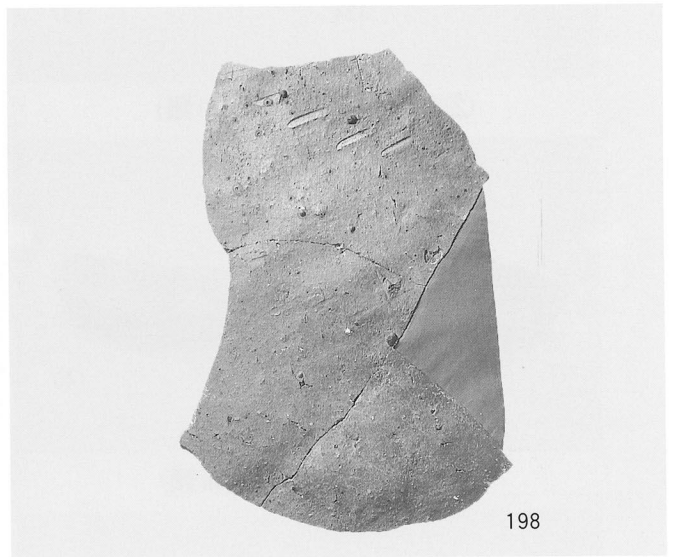
①出土陶器（甕A類-1）



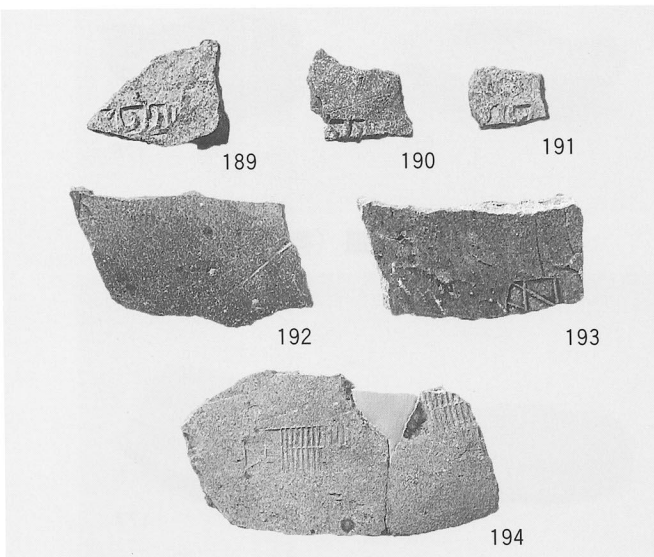
④出土陶器（甕A類-4）



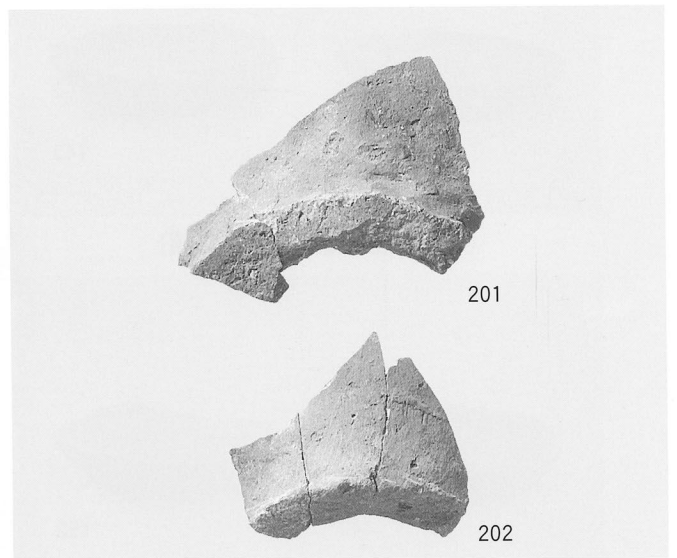
②出土陶器（甕A類-2）



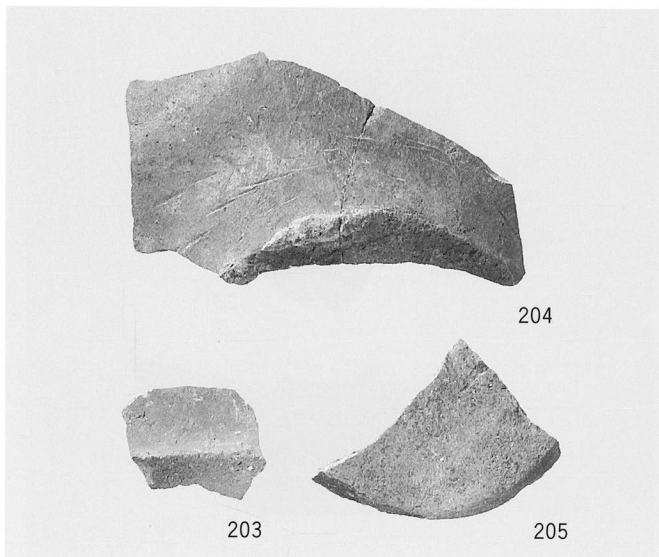
⑤出土陶器（甕A類-5）



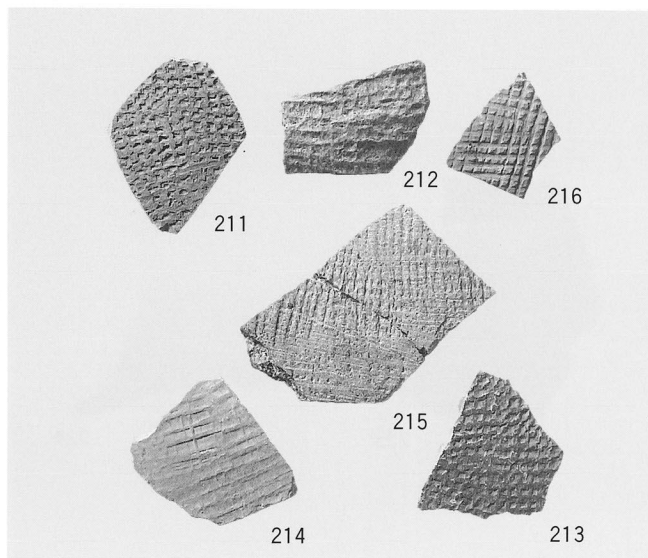
①出土陶器（甕A類-3）



⑥出土陶器（甕A類-6）



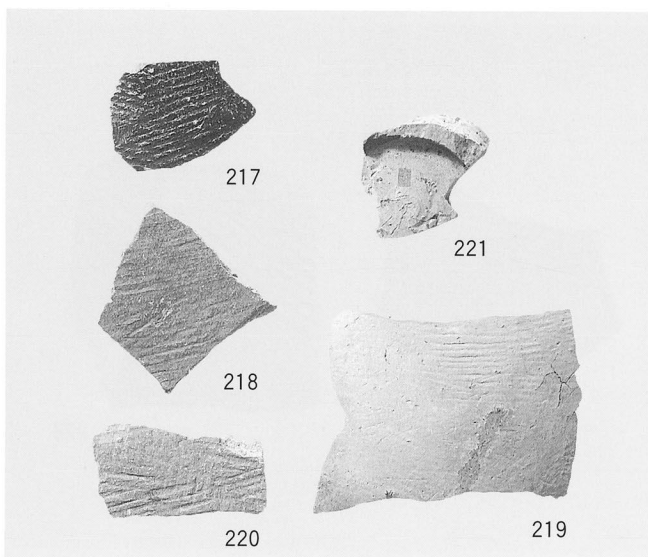
①出土陶器（甕A類-7）



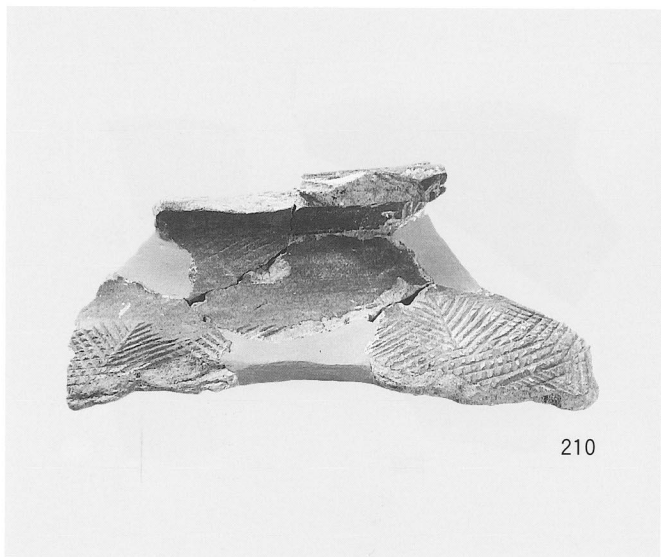
④出土陶器（甕C類-2）



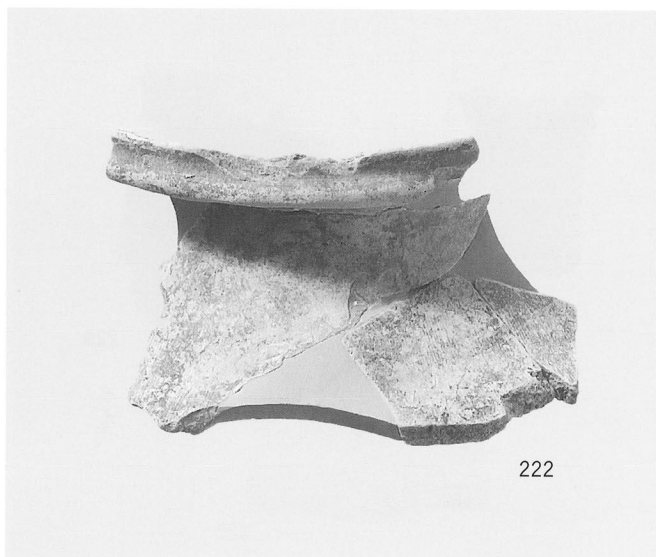
②出土陶器（甕B類）



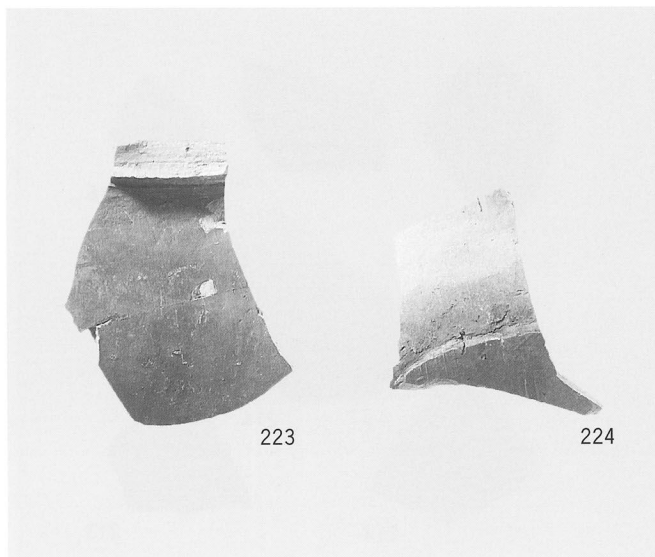
⑤出土陶器（甕C類-3）



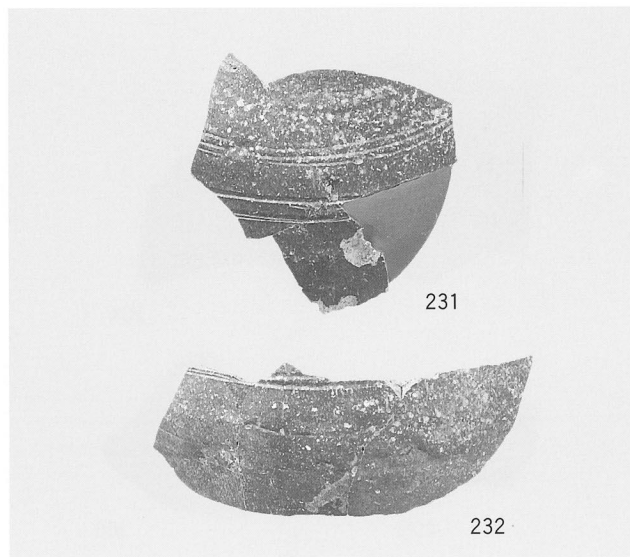
③出土陶器（甕C類-1）



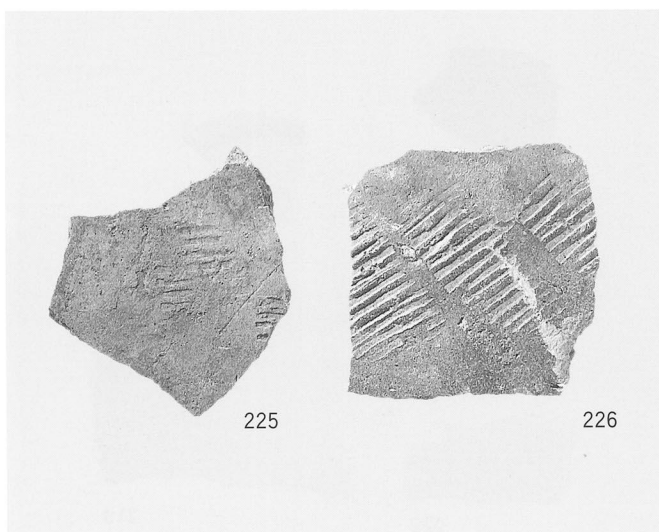
⑥出土陶器（甕D類）



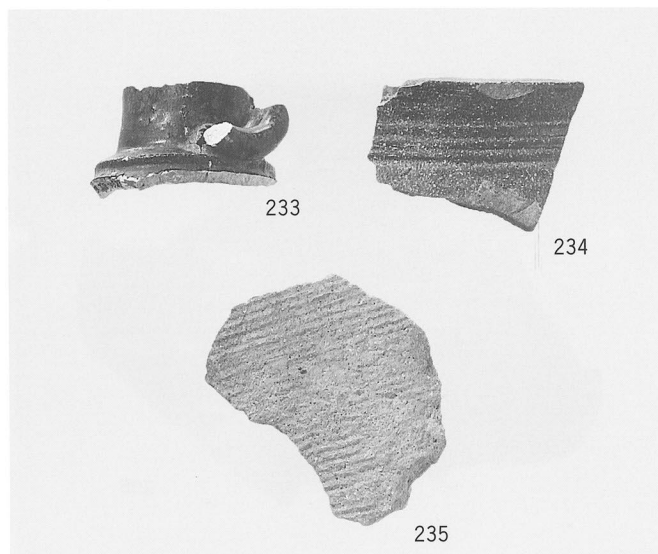
①出土陶器 (甕E類)



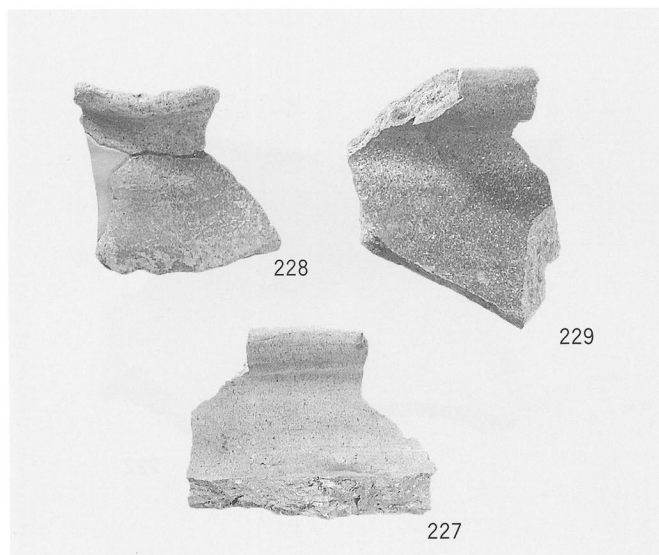
④出土陶器 (壺B類)



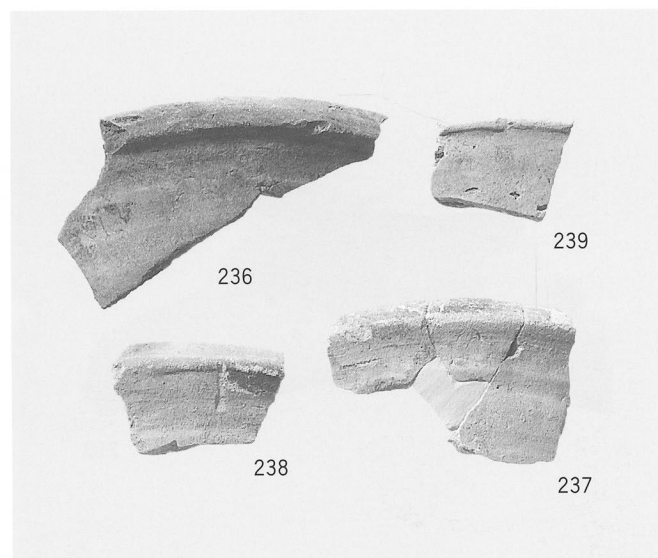
②出土陶器 (甕F類)



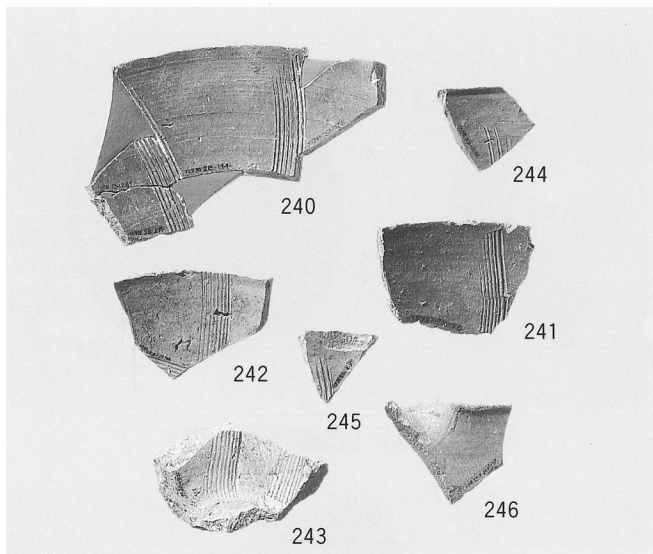
⑤出土陶器 (壺C類)



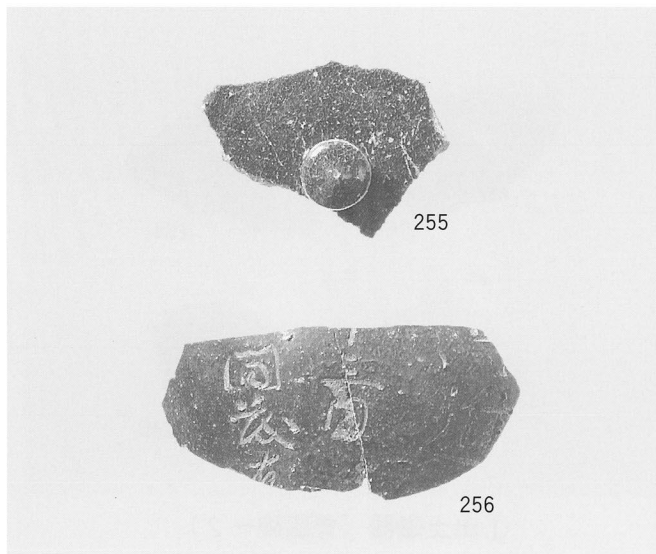
③出土陶器 (壺A類)



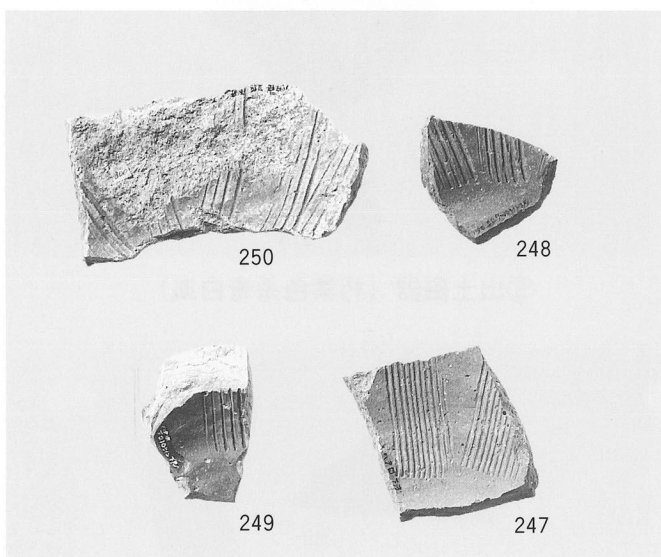
⑥出土陶器 (捏鉢)



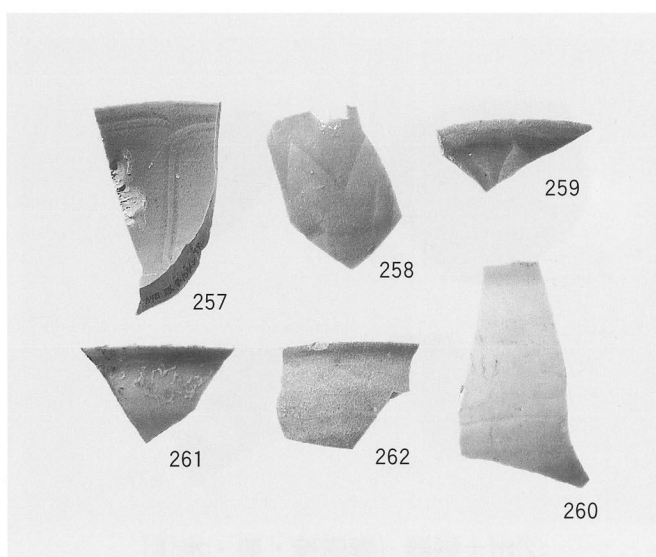
①出土陶器 (搗鉢-1)



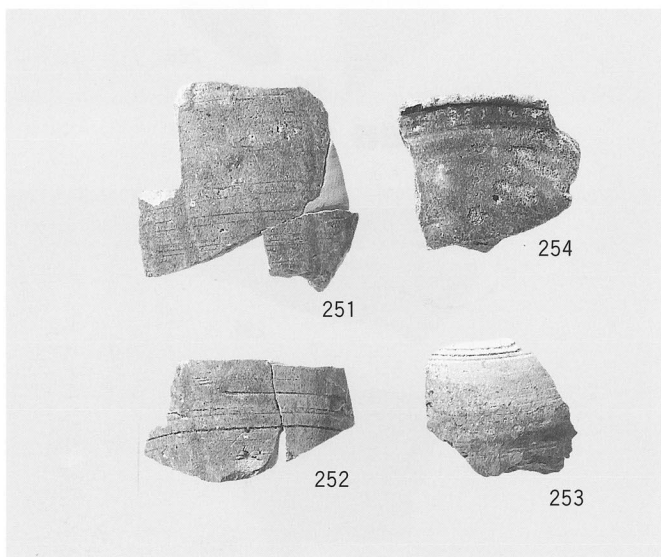
④出土陶器 (土瓶)



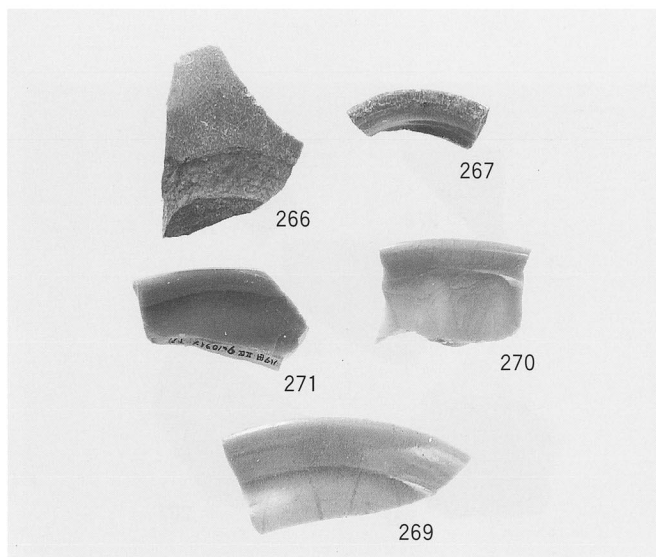
②出土陶器 (搗鉢-2)



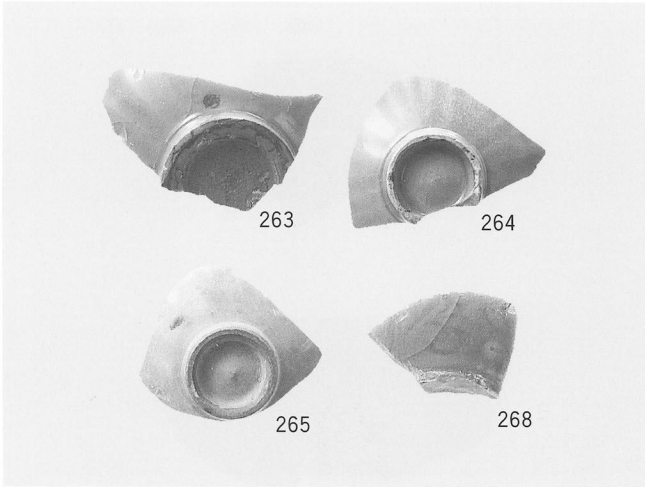
⑤出土陶器 (青磁碗-1)



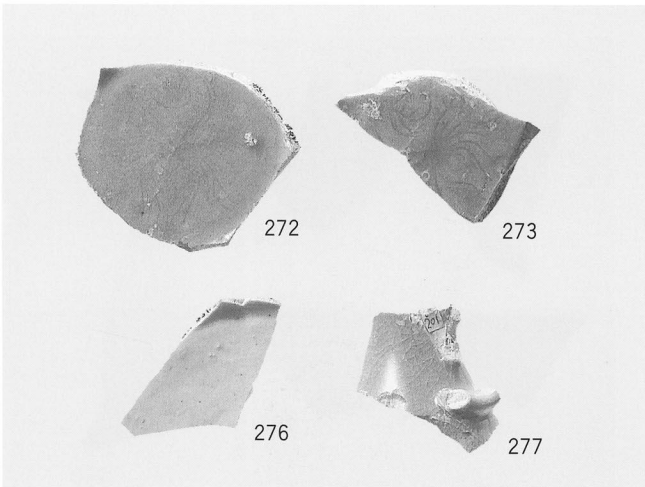
③出土陶器 (瓶子・深皿)



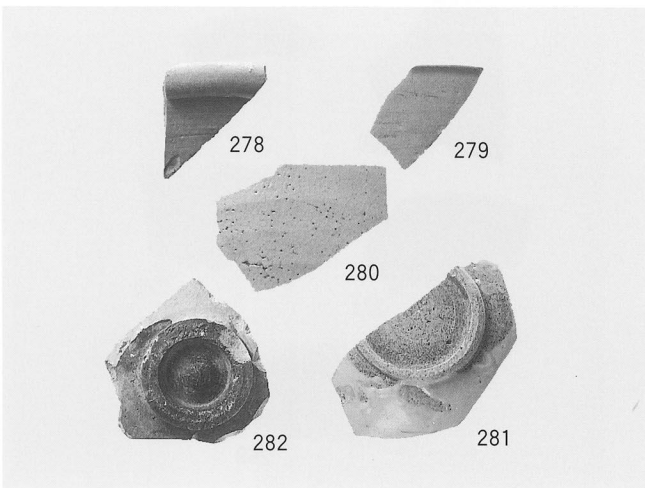
⑥出土陶器 (青磁环)



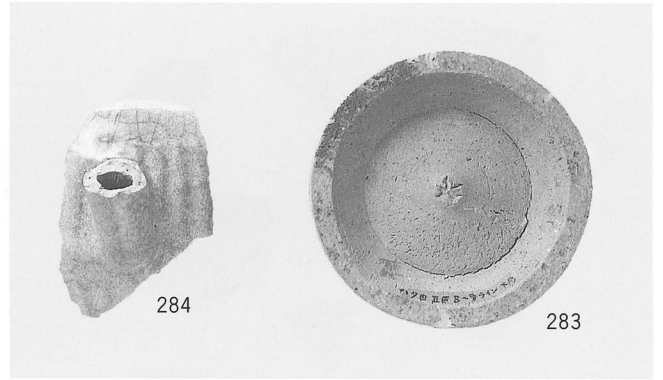
①出土磁器 (青磁碗-2)



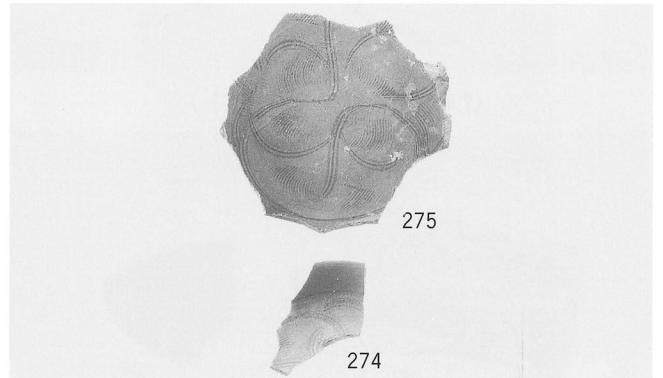
②出土磁器 (青磁碗·皿·水注)



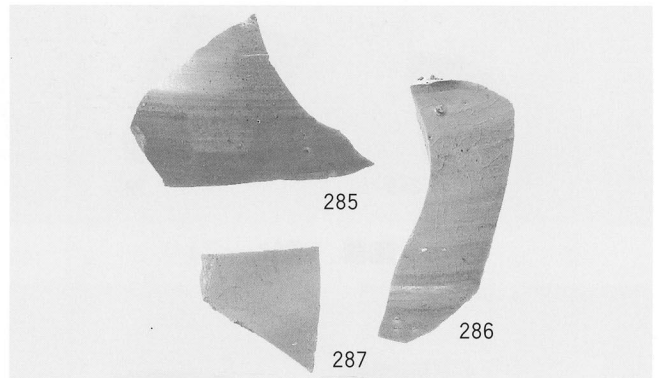
③出土磁器 (白磁碗)



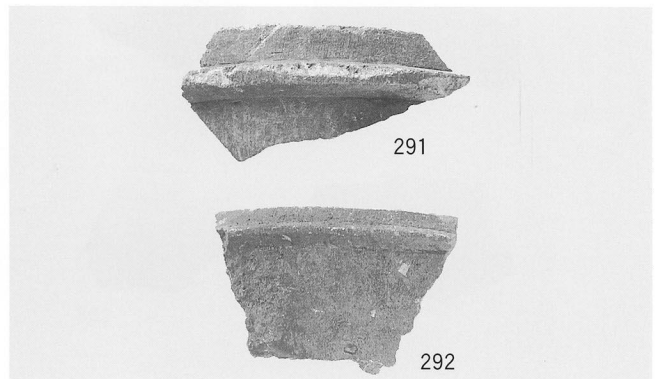
④出土磁器 (白磁水注·壺)



⑤出土磁器 (朽葉色系青白皿)



⑥出土磁器 (青白磁壺)



⑦出土磁器 (滑石製石鍋)

YOMESAKA

嫁 坂 遺 跡

第Ⅳ章 嫁坂遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と環境（第1図）

嫁坂遺跡の所在する都城市は東側を鰐塚山系、西側を瓶台山や白鹿岳などの山地や霧島山系に囲まれた盆地の中央部に位置する。嫁坂遺跡は市域南西部の梅北町に所在し、都城盆地南部の金御岳（標高472m）から延びる丘陵により東西を挟まれた標高167mの低地に位置する。

周辺の遺跡を時代を追って概観してみると、旧石器時代では本遺跡北西部を北流する梅北川左岸に細石刃石器群を出土した大岩田上村遺跡が位置する。縄文時代では大淀川と梅北川に挟まれた台地上の宮尾・立野遺跡や萩原川左岸の天ヶ淵遺跡で早期の土器が出土し、梅北川上流の緩毛原第2遺跡では前期～中期の土器、大岩田上村遺跡や隣接する大岩田村ノ前遺跡、梅北川を挟んだ台地上の横尾原遺跡、黒土遺跡、緩毛原第2遺跡の北東部に隣接する嫁坂遺跡、梅北佐土原遺跡などで後期、晩期を中心とした遺物が出土している。弥生時代～古墳時代の遺跡としては、黒土遺跡、大岩田村ノ前遺跡、市街地南東部の上ノ園第2遺跡、鹿児島県に隣接した大淀川右岸の鵠尾第2遺跡、梅北川上流の段丘上に位置する大浦遺跡など竪穴住居跡を検出した遺跡があげられる。中世～近世では、溝状遺構や道路状遺構を検出した大岩田村ノ前遺跡、大岩田上村遺跡、黒土遺跡、水田跡や畠跡を検出した天ヶ淵遺跡、鵠尾遺跡、嫁坂遺跡、天ヶ淵遺跡の後背丘陵地に位置する中世城郭の六ヶ城、池平城、中世の砦跡といわれる天ヶ峯陣跡、金御岳遺跡、寺院跡の西生寺跡（古代、近世）、千手院跡、勝軍院跡、近世の道標である今町一里塚などがある。

（高橋）

[参考・引用文献]

『宮崎県史』資料編 考古Ⅰ 宮崎県史刊行会 1989

「都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内南部）」『都城市文化財調査報告書』第6集

都城市教育委員会 1987

「大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書」『都城市文化財調査報告書』第14集 都城市教育委員会 1991

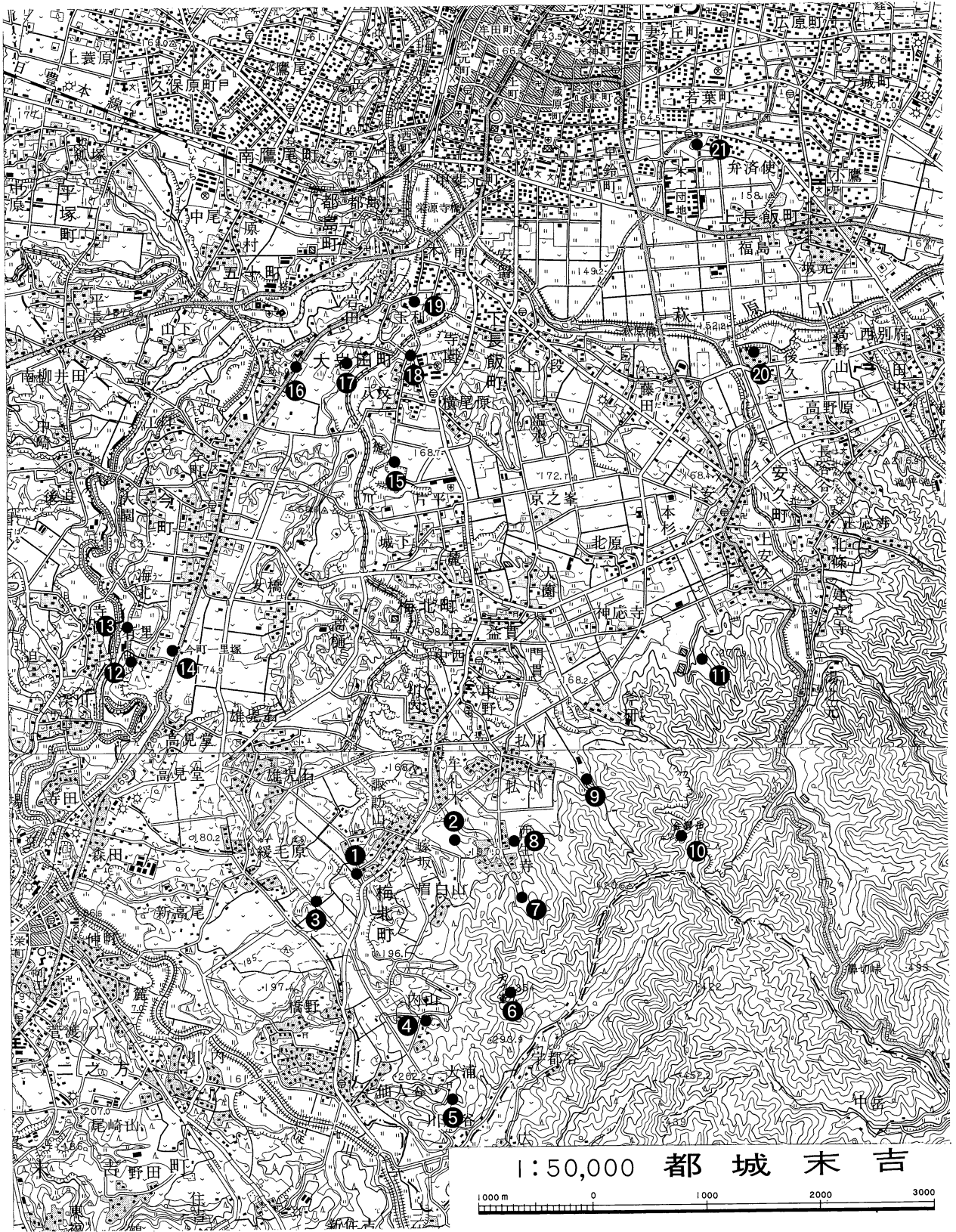
「黒土遺跡」『都城市文化財調査報告書』第28集 都城市教育委員会 1994

「天ヶ淵遺跡」『都城市文化財調査報告書』第33集 都城市教育委員会 1995

「大浦遺跡」『都城市文化財調査報告書』第37集 都城市教育委員会 1997

第2節 層序（第2図）

遺跡の地形は、調査区の北側に向かって僅かに傾斜している。このため、各土層のレベルも全体的には北側寄りが若干低くなるが、個別の水田遺構に堆積する土層はほぼ水平を保っている。一方、調査区南東端は後背の金御岳から延びる丘陵の縁辺部にあたり、調査区中央に向かって緩斜面を形成する。このため土層の堆積も一様ではなく、各層とも低位ほど厚くなる。土層の特徴は低位の水田面とは全く異なるため、分けて後で記載する。



- | | | | |
|-------------|------------|--------------|--------------|
| 1. 嫁坂遺跡 | 2. 梅北佐土原遺跡 | 3. 緩坂原第2遺跡 | 4. 大浦遺跡 |
| 5. 千手院跡 | 6. 天ヶ峯陣跡 | 7. 西生寺跡 (平安) | 8. 西生寺跡 (近世) |
| 9. 勝軍院跡 | 10. 金御岳遺跡 | 11. 王子原遺跡 | 12. 鴛尾遺跡 |
| 13. 坂ノ下遺跡 | 14. 今町一里塚 | 15. 横尾原遺跡 | 16. 宮尾・立野遺跡 |
| 17. 大岩田上村遺跡 | 18. 黒土遺跡 | 19. 大岩田村ノ前遺跡 | 20. 天ヶ渕遺跡 |
| 21. 上ノ園第2遺跡 | | | |

第1図 嫁坂遺跡位置図

まず、低位水田面の土層について堆積状況をみると、表土から今回の掘り下げ最深部までの深さは約2.4 mで、大きく29層に大別でき、さらに各層を細分すると73層に分層できる。以下、大別した29層について記述する。

1層は現耕作土で、最深部は約60 cmを測る。この中には、霧島新燃享保テフラ（享保2年）に由来すると思われる灰色軽石をわずかに含む。

2層は灰褐色弱粘質土で、締まりが若干ある。1層と同様の灰色軽石を含む。粘性の層位、軽石の混入割合により6層に細分できる。層厚は10～30 cmである。

3層は、南側調査区の中央寄りにわずかに堆積する黒褐色弱粘質土で、締まりがある。1層と同様の灰色軽石をまばらに含む。堆積の状態から、2層の耕作時に大半が攪拌により失われたものと思われる。

4層は褐灰色あるいは灰黄褐色を呈する弱粘質土で、下位ほど硬度が増す。灰色軽石をまばらに含む。色調及び硬度により12層に細分できる。最下層には橙色の細砂粒が多く混入しており、流水があったものと思われる。30 cmの層厚である。

5層はにぶい黄褐色のシルト質土で締まりがある。灰色軽石を多く含む。南側調査区中央部に部分的に確認されており、上層の耕作により不安定な堆積を示しているものと思われる。最大層厚は5 cmを測る。

6層は橙色細砂粒を多く含むにぶい黄褐色のシルト質土である。灰色軽石をわずかに含み、若干締まりがある。橙色細砂粒および灰色軽石の混入割合により、3層に細分できる。細分層のうち上位層ほど細砂粒の混じりが密になる。南側調査区のみを確認された土層であり、隣接して検出された旧河道からの氾濫層と考えられる。堆積は20 cmほどである。

7層は褐灰色の細砂粒層で、橙色細砂粒を多く含む。また、白色軽石をわずかに含む。橙色細砂粒、白色軽石の混入割合により3層に細分できる。各層とも締まりは弱い。最大層厚は20 cmを測る。旧河道の氾濫により堆積した層と思われる。

8層は灰黄褐色シルト質土で、橙色細砂粒を含む。橙色細砂粒わずかに含む層と密に混入する層が互層を成し、4層に細分できる。10 cmほどの層厚である。

9層はにぶい黄褐色を呈する細砂粒層で、白色軽石をわずかに含む。層厚は5～15 cmである。南側調査区のみ堆積しており、旧河道の氾濫層と思われる。締まりは弱い。

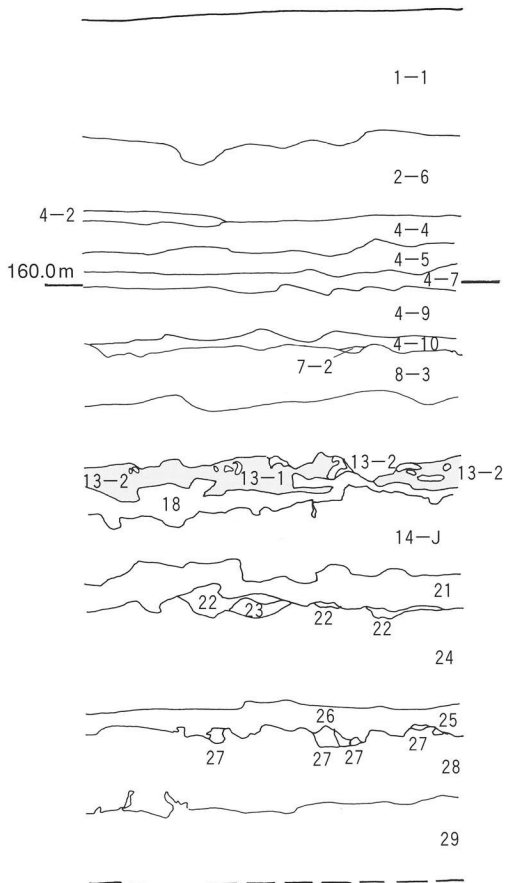
10層はにぶい褐色を呈するシルト質土で、白色軽石を多く含む。締まりは弱い。10～25 cmほどの堆積である。

11層はにぶい黄褐色の細砂粒層と橙色細砂粒層がラミナー状に堆積する。締まりは弱い。南側調査区の中央部に部分的に堆積し、層厚は薄く4 cmほどである。

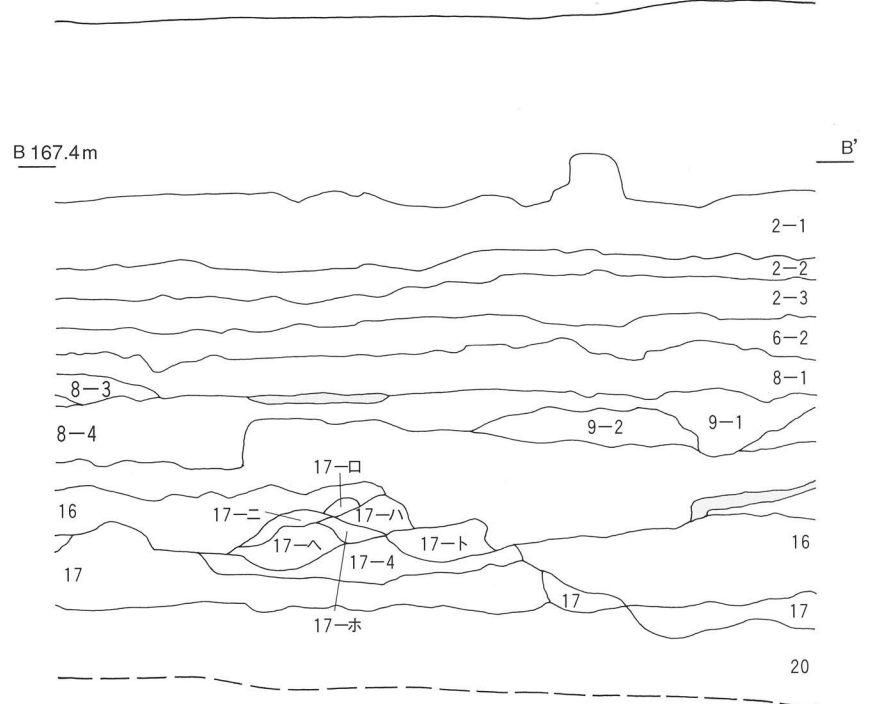
12層は灰褐色のシルト質土で、締まりが弱い。桜島文明軽石層直上の耕作土の床土と思われる。桜島文明軽石層の中にもかなりの割合で混じるが、耕作時の巻き込みの結果と考えられる。土質が桜島文明軽石層直下の水田耕作土に酷似しており、軽石降下後災害復旧のために天地返しが行われた可能性がある。ただし、今回の調査区内には天地返し痕と思われるような凹凸が軽石層直下の水田面に確認できていないため、耕作土の広範囲にわたる拡散があったのかどうかは今後の調査を待ちたい。

13層は1471年（文明3年）桜島噴出の桜島文明軽石層で、上位の灰白色粗粒火山灰層と下位の白色軽石層に細分できる。最大層厚は20 cmである。

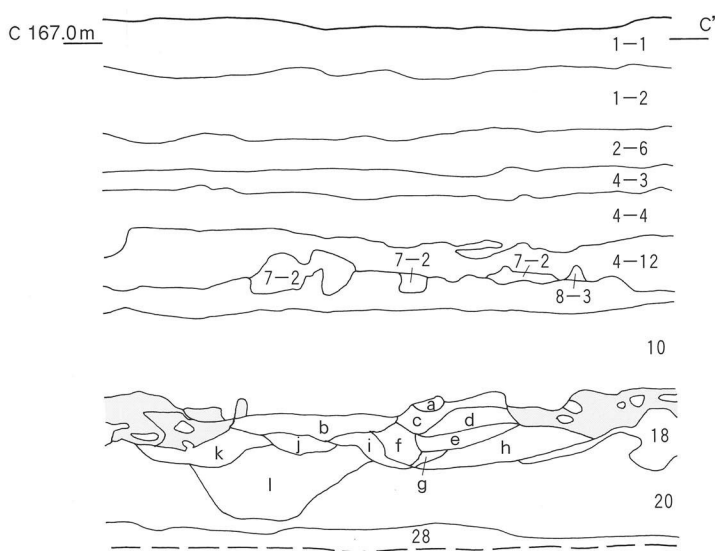
土層①



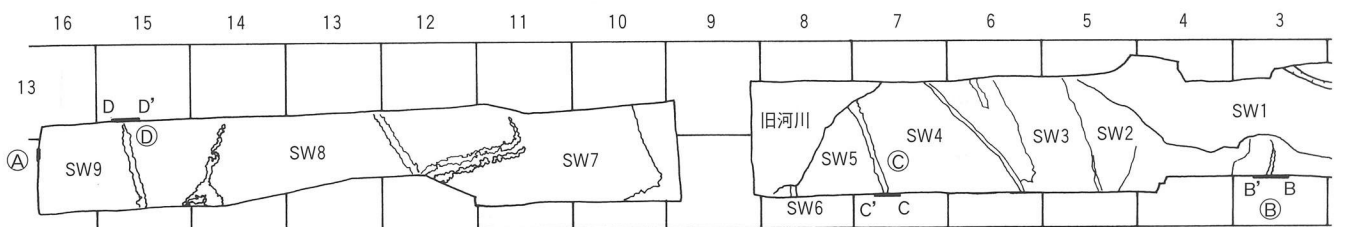
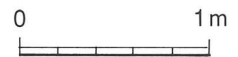
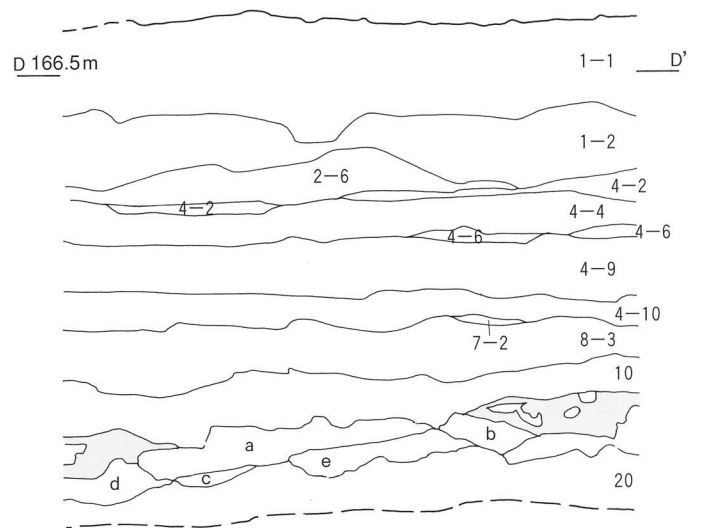
土層②



土層③



土層④



第2図 嫁坂遺跡土層図

14層は畦畔の造成土で、シルト質である。締まりは弱い。色調、混入物により10～11層に細分でき、造成課程を示している。

15層は南側調査区中央から南側にかけてのみ確認された水成堆積土層である。橙色、にぶい橙色、褐灰色細砂粒土層がラミナー状に堆積する。混入物はなく、締まりは弱い。20cmほど堆積している。

16層は15層と同範囲で堆積している。下層の褐灰色シルト質土層と15層が攪拌された状態であり、旧河道の氾濫によるものと思われる。15～20cmの層厚である。

17層及び18層は桜島文明軽石層直下の水田耕作層で、耕作痕が顕著である。褐灰色シルト質土で、締まりは弱い。17層の分布範囲は16層にほぼ重なる。層厚は10～20cmほどである。

19層は北側調査区中央部で検出した畦畔の基盤の一部で、褐灰色シルト質土に黒色粘質土が混じる。

20層は褐灰色シルト質土で、30cmほどの層厚である。

21層～27層は北側調査区の北端で確認した土層である。

21、24、25の各層は灰褐色シルト質土で、21層に若干締まりがある他は締まりがない。

22層は23、24層の混合層で、24層の窪みにわずかに堆積する。

23層はにぶい黄橙色を呈する細砂粒層で、24層の窪みにわずかに堆積する。締まりはない。

26層は27、28層の混合層である。

27層は灰白色細砂粒層で、26層とともに28層上面の窪みにわずかに堆積する。

28層は黒褐色粘質土層で、20cmほどの層厚である。締まりはない。

29層はにぶい黄橙色を呈する細砂粒層で、締まりはない。30cm以上の層厚である。

調査区南東端の丘陵部の土層について、基本土層の確認は、調査区南東隅の東側壁面で行った。

表土は褐灰色の非粘質土で、30cmほどの層厚である。

2層はにぶい黄褐色弱粘質土に黒褐色の非粘質土ブロックが多く混じる層で、締まりがある。4,200年前噴出の霧島御池軽石を多く含む。10cmほど堆積する。

3層は明黄褐色のシルト質土で、締まりが若干ある。御池軽石をまばらに含む。締まりは若干ある。35cmほどの堆積である。

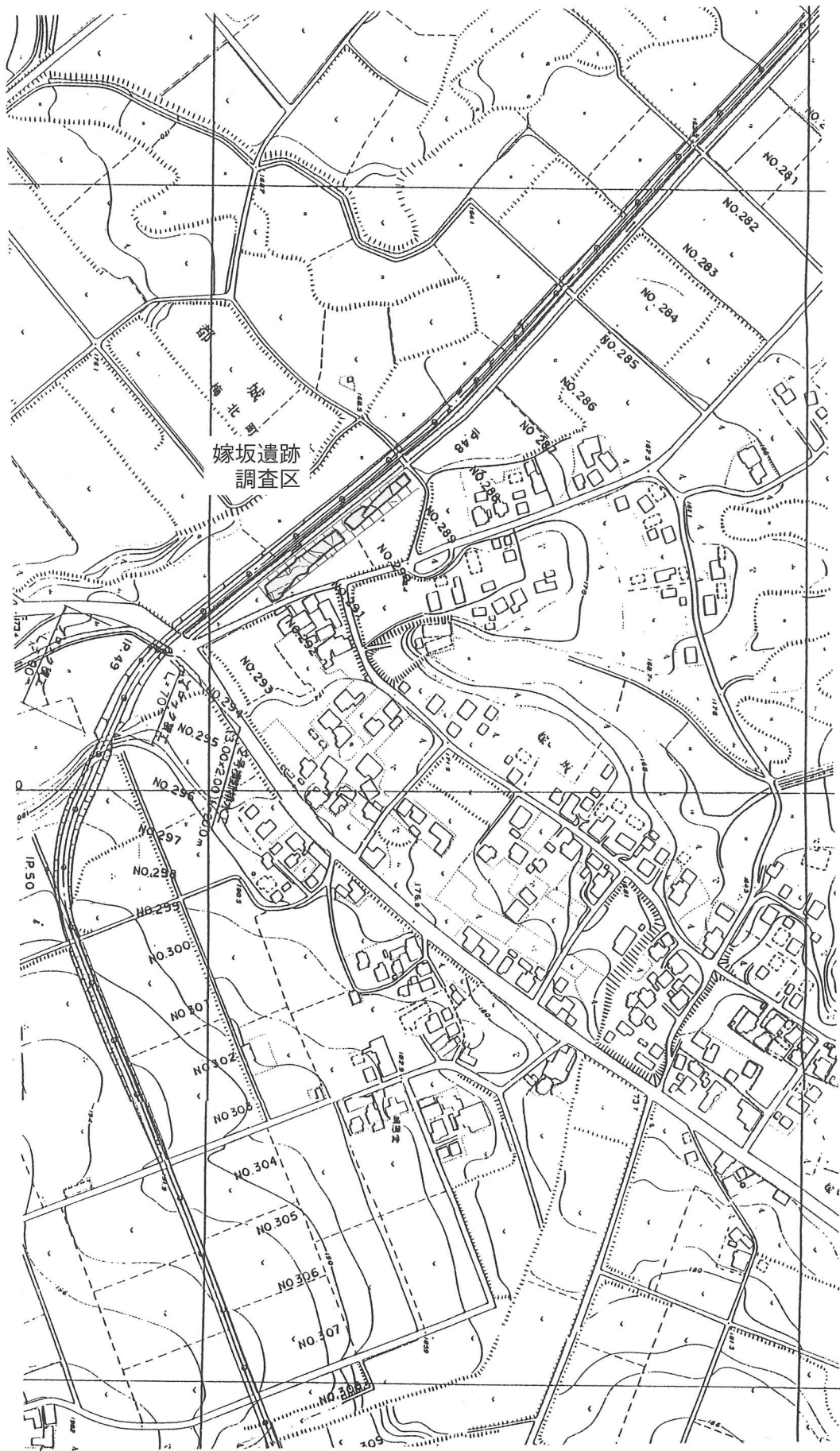
4層は暗褐色シルト質土で、にぶい黄褐色シルト質土のブロックをまばらに含む。締まりは若干ある。土層の堆積の状態から、遺構の埋土の可能性がある。25cmほどの堆積である。

5層は暗褐色シルト質土に褐灰色を呈する砂のブロックがまばらに混入する。締まりが若干ある。

(高橋)

第3節 調査の経過

本遺跡では、試掘調査の結果から桜島起源文明降下軽石層（文明白ボラ）直下から良好な水田跡の検出が予想されたため、今回の調査は水田跡の調査区内全面検出を念頭に行った。本調査は農業用道路の建設に伴うものであるため、調査区が狭長であり、廃土置き場の確保から調査区を2分して進める必要があった。



第3図 嫁坂遺跡地形図 (1 / 1,000)

工事サイドとの協議の結果、国道寄りの南側から調査を行うこととし、調査区全体の約5分の2について平成10年9月10日に表土の除去を開始した。事前の確認調査で文明白ボラ層より上層での遺構・遺物の存在は確認できなかったため、表土の除去は、文明白ボラ層の1層上までの深さ約1mを重機により慎重に行った。その後、人力により文明白ボラ層の上層を除去し、掘り下げ部全面に文明白ボラを表出させた後、慎重に文明白ボラを除去し水田跡を検出した。この段階で検出した遺構は、旧河道及び水田跡4面、畦3本、テラス状遺構（大畦）1面であった。水田跡の検出作業と併せて、調査区南東隅の後背から延びる丘陵裾部の調査を併行して進めた。この部分には文明白ボラの堆積はみられず、比較的浅い層から土器片が確認されたため、人力により表土の除去を行った。表土下約20cmから溝状遺構5条を検出した。遺構検出面から更に約20cm掘り下げた御池ボラを含む明黄褐色土層上面から、縄文後・晩期の土器片及び、ピット28基、土坑2基、溝状遺構1条を検出した。

南側調査区の実測図作成と併行して10月29日から調査区を北側に移し、全体の約2分の1について南側調査区と同様の手順で調査を進めた。北側調査区では、文明白ボラ除去後に水田跡3面、畦4条を検出した。水田面の調査を終了した後、調査区北端約100m²を水田検出面からの深さ約90cmまで掘り下げ、遺構・遺物の確認を行ったが、何ら検出はできなかった。

北側調査区の水田遺構検出作業と併行して、11月12日から南側調査区から続く調査区中央部、調査区全体の約10分の1について、同様の手順で作業を開始した。文明白ボラ除去後に検出した遺構は、南側調査区で検出した遺構に続くテラス状遺構、水田面それぞれ1面及び、新たな水田跡1面、旧河道1本である。

平成10年12月24日に全ての調査を終了した。

（高橋）

第4節 調査の記録

調査は、農業用道路部分の幅約8～15m、長さ約130mを対象として行った。

調査の結果、旧河道が南側から南北方向に貫流し、調査区の中央部付近で東西方向に流れを変え蛇行していることが確認された。また、桜島文明軽石に覆われた中世の水田跡を調査区の南東隅を除くほぼ全面で検出した。水田は旧河道により大きく南北に分断されており、北側で3面、南側で6面の水田面を確認した。なお、水田面全体に農耕具痕や足跡などが明瞭に残っており、特に中央部の第4水田跡では南北方向に直線的に、第5水田跡では南側を中心として弧を描くように鋤先痕が確認されている。調査区の南東隅では、道状遺構を旧河道の直交方向に3条、溝状遺構を旧河道に平行して3条検出した。共伴する遺物が少ないため時期を明確にすることはできないが、切り合い関係と埋土の状況から数時期に分かれるものと思われる。また、御池軽石を含む褐色土層上面で、隣接する土坑2基、ピット28基を検出した。このうちピット8基は土坑2基を囲むように円形に配置されていた。埋土からは縄文後期～晩期の土器が出土している。

遺物は、縄文後期～晩期土器、弥生土器、土師器、陶器、磁器合計約50点、磨製石斧3点、黒曜石2点が出土した。

1. 遺 構

水田遺構

SW1～SW6は南側調査区で検出した。調査区南東側で検出したSW1が最高位の水田遺構であり、北西側のSW6へと段々に水田面のレベルが低くなる。北側調査区では3面の水田遺構（SW7～SW9）を検出した。南側調査区と同様、SW7を高位として南東から北西へと段々に造成されている。

SW1

形状は、東西方向に長軸をとり、西側幅3.8m、東側幅2.3mの不整形を呈する。水田面の東側を旧河道に切られる。水田面の南側長軸方向に肩幅（上場幅）20cm前後の畦を検出。

SW2

東西方向に長軸をとり、東方向に鋭角に開く。最大幅は6mを測る。水田面の東側を旧河道に切られる。北西部で肩幅30cmの畦を検出。遺構面に踏み込みの激しい無数の人間の足跡を検出したが、方向に規則性が無く、形状も多様であった。

SW3

北東方向に長軸をとり、幅6mの帯状を呈する。遺構の北側に幅2～5mの大畦を検出した。高位のSW2とは20cm程の段差がある。水口は確認できなかった。遺構面にはSW2同様踏み込みの激しい無数の足跡を検出したが、方向に規則性が無い。

SW4

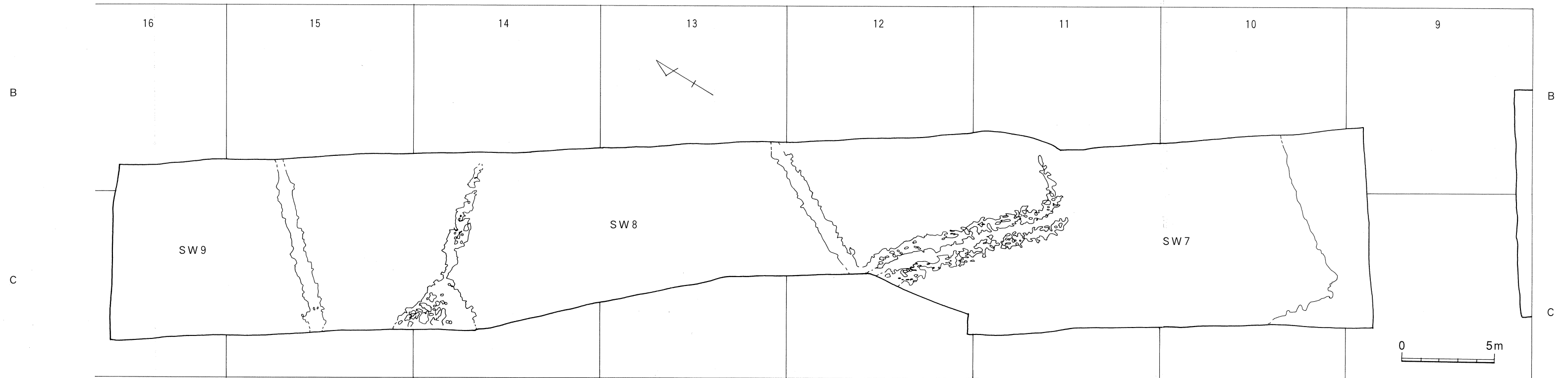
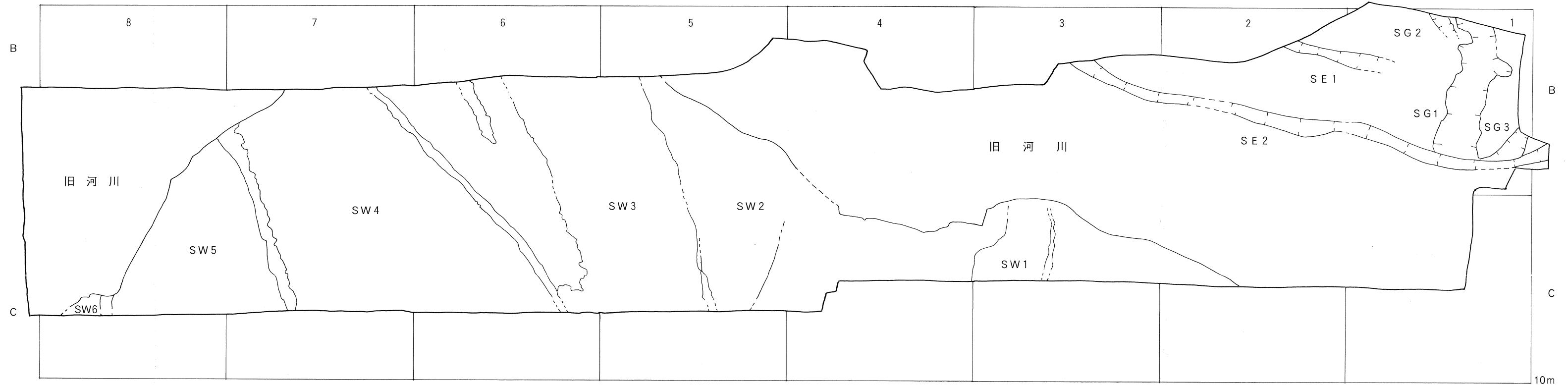
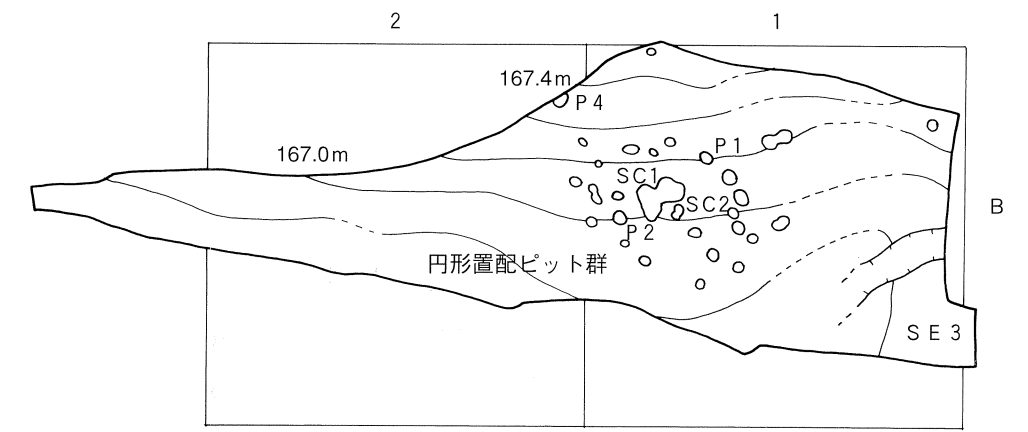
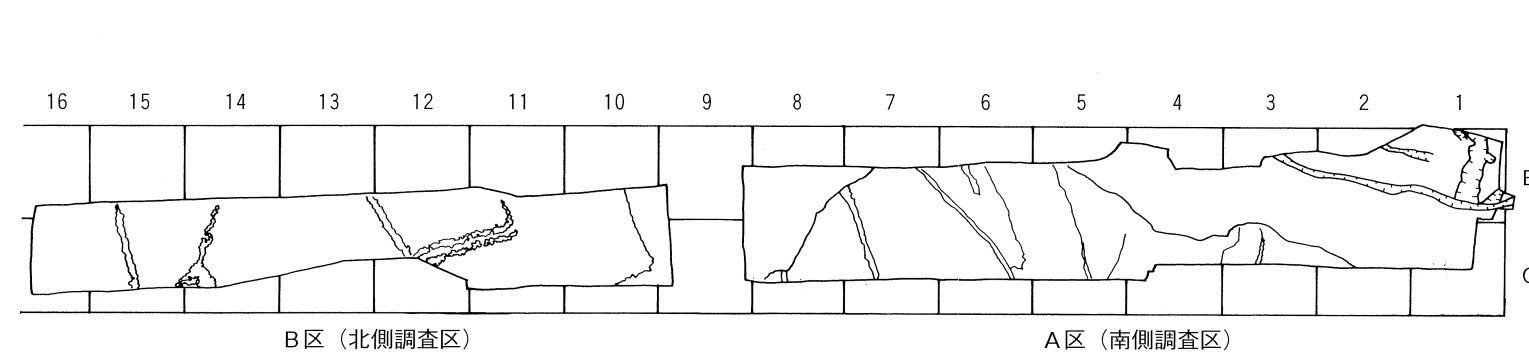
南北方向に長軸をとり、南側に開く。北側は旧河道に切られている。遺構の幅は北側で7m、南側で11mを測る。西側に肩幅70cm前後の畦を検出したが、水口は確認できなかった。また、水田面と西側畦の間に南方向に鋤先を差し込むように幅50cm深さ10cm程の溝が鋤き込まれていた。北方向に下がりながら畦を盛り上げていった結果と思われる。高位のSW3との段差は20cmを測る。水田面には、幅20cmほどの鋤先痕の列が西側畦と平行して面全体に検出された。南方向への1～2列の鋤き込みと逆方向への2～3列の鋤き込みが繰り返される部分や南方向への1～2列の鋤き込みの間に逆方向への7列程の鋤き込みが認められる部分等、方向には規則性がみられる。

SW5

北東方向に長軸をとり、短軸幅は8.8mを測る。西側辺には幅70cmの畦が確認できた。遺構の北側は旧河道により切られている。水田面には南隅を中心として放射状に鋤先痕が検出された。詳細にみると、水田面の北側一部は鋤先を西側に向け、下がりながら北東方向から次第に東方向へと弧を描くように向きを変えて鋤き込んでいったことがわかる。南側の大部分は鋤先を北側に向け、東から西、西から東へと弧を描くように往復しながら南方向へと鋤き込んでいったことが確認できる。鋤先の幅は25cmほどである。高位のSW4との段差は15～20cmを測る。

SW6

遺構のほとんどが旧河道により切られており、全体の形状は不明である。



第4図 嫁坂遺跡 遺構配置図 (1 / 200)

SW7

長軸を南北にとり、東西幅は23mを測る。遺構の西辺に肩幅80cmの畦を検出したが、水口は確認できなかった。水田面には方向に規則性のない人、牛の足跡を無数検出したほか、鋤先痕も検出した。また、遺構内の中央から西側にかけて、SW7と主軸をほぼ同じにとる畦状遺構を検出した。検出した遺構は2条平行に南東方向に延び、東隅で直角に屈折して北東方向へと延びるが、辺は形成せずに途切れる。南辺はSW7の西畦に直角に接する。東西幅は11mを測る。畦状遺構には全体に無造作に踏み込まれた足跡があり、東辺が途切れていることから、畦としての機能は失っていたものと思われる。プラントオパール分析では、本遺跡から多くの生育段階初期（苗の段階）の稲が検出されており、田植え直後の状況であったと推定されている。したがって、本遺構は田植え段階で踏み込まれた足跡の残る苗代の畦である可能性が考えられる。

SW8

長軸を北東方向にとり、南西方向に台形状に広がる。検出した最大幅は26mを測る。遺構の北西辺に肩幅70cmの畦を検出したが、水口は確認できなかった。SW7との段差は15～20cmを測る。水田面にはSW7同様、方向に規則性のない人、牛の足跡を無数検出したほか、鋤先痕も検出した。遺構内の中央から西側にかけて、北西畦と約45°の角度を成し東方向に延びる畦状遺構を検出した。表面にはSW7検出の畦状遺構と同様に、踏み込みの深い足跡が無数確認された。性格は、苗代の痕跡である可能性が考えられる。

SW9

西側の畦が調査区外であるため、全体の形状は判然としない。水田面には、方向に規則性のない人、牛の足跡を無数検出したほか、鋤先痕も検出した。SW8との段差は20cmを測る。

道状遺構

SG1

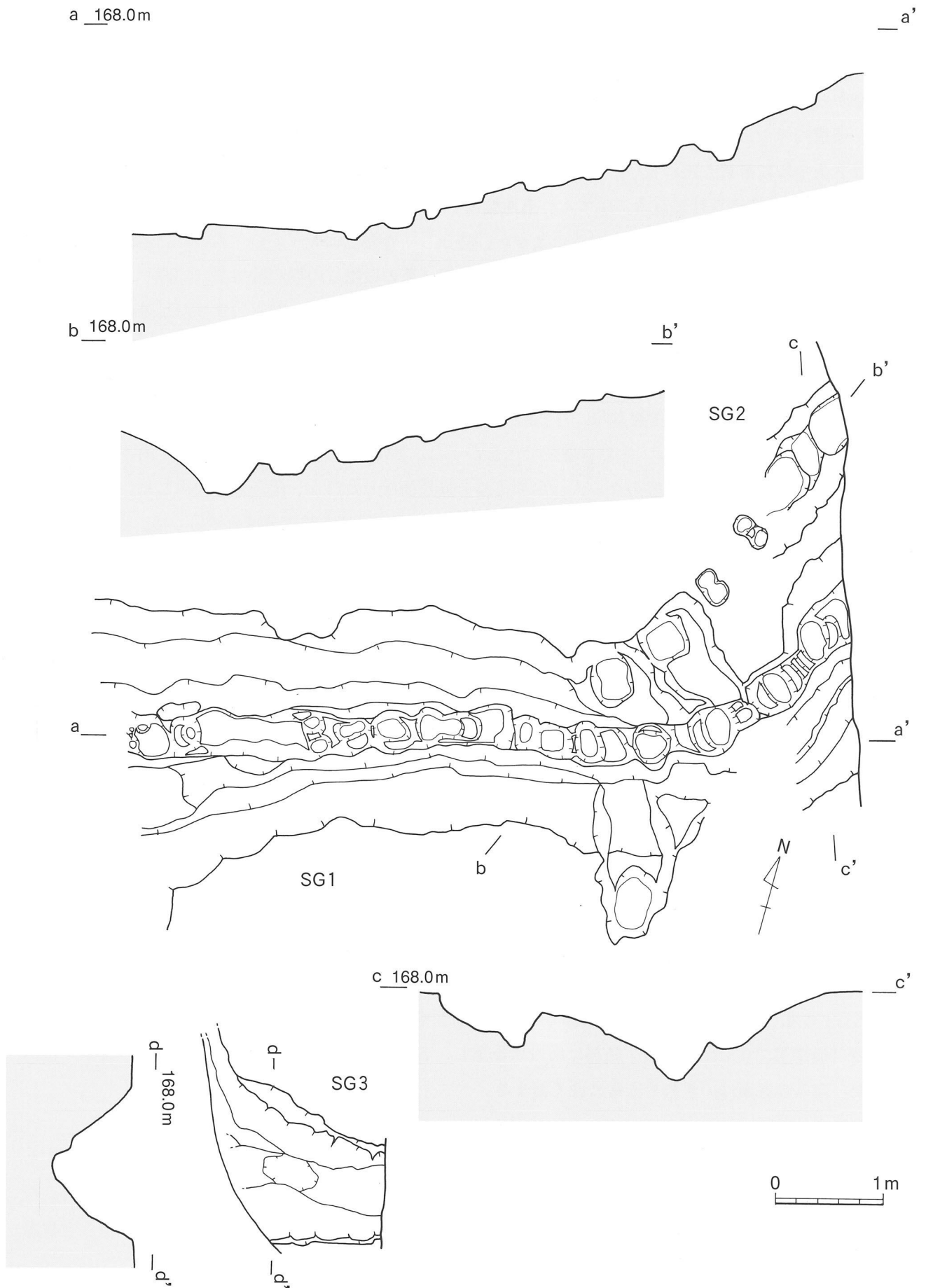
調査区南東部の丘陵から西方向に下り、旧河道にほぼ直角に接する。平面形は、肩幅がほぼ平行で上部が緩やかに湾曲する。断面形はすり鉢状を呈する。肩幅は1.8～2.3m、法尻幅0.7m、検出面からの最深部1mを測る。底部は階段状を呈し、各段には長軸40cm、短軸30cm、深さ10～25cm程の楕円形状の窪みを検出した。窪みの底面はいずれも非常に硬く締まる。

SG2

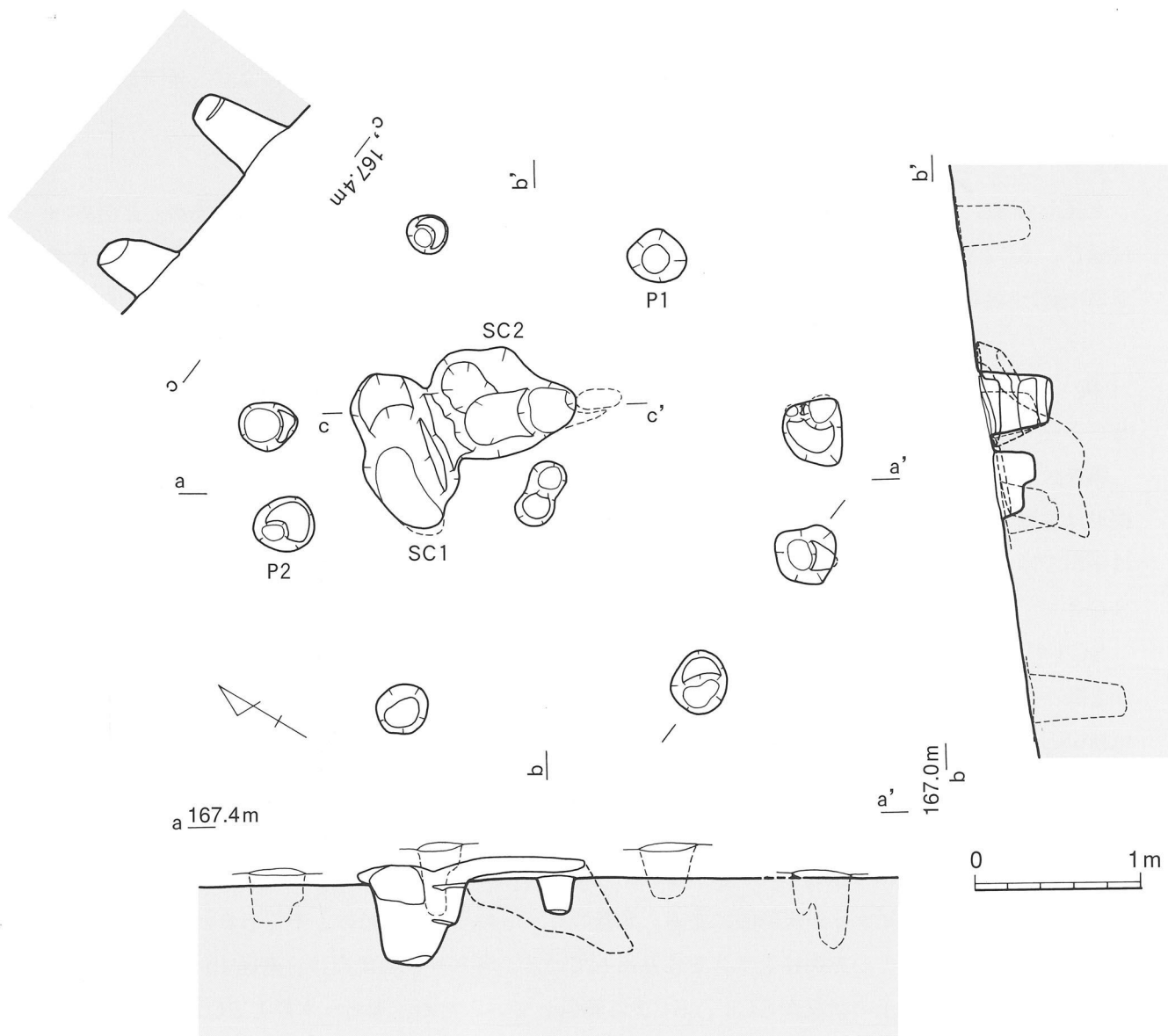
SG1の北に隣接し、SG1の湾曲部で交わる。断面形は碗状を呈する。肩幅0.8m、法尻幅0.5m、深さは最深部で0.2mを測る。底部は階段状を呈し、各段にはSG1と同規模の楕円形状の窪みを検出した。窪みの底面はいずれも非常に硬く締まる。

SG3

SG1の南側に位置する。丘陵部から西方向に下り、旧河道に60°の角度で繋がる。また、SG1とも旧河道に接する位置で交わる。断面形はすり鉢状を呈する。肩幅は0.9～1.4m、法尻幅0.3m、検出面からの最深部0.6mを測る。底部には長軸50cm、短軸30cm、深さ15cm程の楕円形状の窪みを検出した。窪みの底面は非常に硬く締まる。



第5図 嫁塚遺跡 SG1・SG2・SG3 遺構実測図 (1 / 50)



第6図 嫁塚遺跡 SC1・SC2 および円形配置ピット群遺構実測図 (1 / 40)

溝状遺構

SE 1

旧河道の東側緩斜面に位置し、旧河道と併行する。遺構上部の大半は削平され、形状の詳細は不明である。残存する肩幅0.6 m、法尻幅0.2 m、深さ0.2 mを測る。

SE 2

旧河道埋没後に形成された遺構である。旧河道に併行し、北向きにレベルを下げながら延びる。肩幅0.6 m、法尻幅0.4 m、深さ0.2 mを測る。

SE 3

上述したSG、SE検出面から20 cm程掘り下げた明黄褐色土層上面で検出した。丘陵部から北西方向に延び、SG 1と交わる。肩幅0.7～0.9 m、法尻幅0.3～0.6 m、深さ0.35 mを測る。南端底部で深さ30 cmの土坑状の落込みを検出したが、調査区外に延びるため全形は不明である。

土坑・円形配置ピット群

SC 1

調査区南東隅の緩斜面で検出した。主軸を北東方向にとる。平面形は、瓢箪形の不整楕円形を呈する。掘形は主軸よりわずかに西寄りにずれる位置に、南西方向に若干挟り込むように掘り込んでいる。底面は平坦ではなく、中央部がわずかに盛り上がる。長軸98 cm、短軸55 cm、深さ45 cmを測る。

SC 2

SC 1の南東部に位置し、主軸が直交する。平面形は南東方向に凸状に膨らむ不整形を呈する。掘形は遺構の主軸にあわせ南東方向に斜めに掘り込んでいる。中位に階段状に2段のテラスをもつ。長軸80 cm、短軸68 cm、深さ55 cmを測る。埋土はSC 1、SC 2共に御池ボラを含む褐色弱粘質土が最深部に堆積し、切り合い関係も確認できなかったため、同時期の遺構と思われる。

円形配置ピット群

調査区南東隅の緩斜面で検出した。直径22 cm、深さ20 cmのピットを中心とする半径1.6 mの同心円上に、4対、計8基のピットが規則的に並ぶ。8基のピットのうち6基には、中位あるいは低位にテラスをもつ。うち4基は中心方向にテラスを作り出している。各ピットの規模は、直径25～36 cm、深さ30～60 cmを測る。埋土の状況がSC 1、SC 2に類似しているため、本ピット群とSC 1、SC 2とは同時期のものと思われる。配置状況から中央付近に連結状土坑をもつ平地式住居、あるいは壁が消失した竪穴住居の可能性はある。(高橋)

2. 遺物

遺物はB区(Ⅱ層)を中心に道路状遺構やピット内、旧河川、攪乱層等から縄文土器(後期～晩期)、弥生土器、土師器、白磁、磨製石斧等が出土している。出土数は50点余りと少量である。

縄文土器(第7図1～14)

1～10は後期の土器。1～8は深鉢の口縁部。1は外反する口縁部のくびれ部に縦位の貝殻腹縁連続刺突文施文後に押線文を施している。さらに、くびれ部から下位に幅5 mm程の横方向の沈線文を2条、その下に連続沈線を施文後に縦位の貝殻腹縁連続刺突を施し、さらにその下に横方向の沈線文を連続し

て施している。また、口唇部には7～8mmの粘土を貼り付け、数条の刻みを施している。内面調整は貝殻条痕文である。2～5は口縁部が肥厚する。2は口縁部と口縁部下に工具による斜め方向の連続沈線が施されている。口唇部から外面にかけてはナデ調整、内面は斜め方向の貝殻条痕文が見られる。3は口縁部断面が三角形に近い。口縁部にはV字状の沈線が数条見られ、口縁部下にも横方向の沈線と思われる線が2条ほどある。外面は風化が著しいがナデ調整、内面は横や斜め方向の条痕文が見られる。4は口縁部断面が三角形を呈する。口縁部に工具による斜め方向の刺突文が連続して施されている。内外面とも工具によるナデ調整（外面は横方向）が施されている。8は口縁部断面が三角形を呈する。内外面とも工具による横方向のナデ調整が行われている。内面はより丁寧な調整である。1～4・8は北側調査区（B区）2層からの出土である。5～7は無文土器の口縁部である。5は外面が横方向の粗いナデ調整、内面が工具による横方向の丁寧なナデ調整が施されている。SG1の埋土中からの出土である。6は外面が工具による横ナデ、内面がナデ調整のみが施されている。山形口縁と思われる。旧河川からの出土のため外面には鉄分が付着する。7は口縁部がやや肥厚する。外面は工具による横ナデ、内面は工具による斜めや横方向のナデ調整が施されている。口唇部は粗いナデ調整で平坦になっている。外面には指押さえの跡も見られる。ピット4からの出土である。9は胴部片で外面に斜めや横方向の貝殻条痕文、内面に工具による丁寧なナデが施されている。外面には炭化物が数カ所に付着している。試掘調査時の出土である。10は平底の底部で外面・内面に縦方向の貝殻条痕文、底は粗いナデで調整されている。B区攪乱層からの出土である。

11～14は晩期の精製磨研の浅鉢土器である。11は胴部が偏球状に張り、口縁部が短く外反する。口縁部～胴部にかけての約4分の1程度の部位が残る。内外面ともミガキによる調整が施されている。外面は鉄分が付着するが黒褐色、内面は風化気味だが黄灰色を呈する。口唇部下部の外面に沈線、内面に工具による凹線文が見られる。B区2層からの出土である。12は口縁部片で内外面とも横方向のミガキが施されており、外面は褐灰色、内面は黄灰色を呈する。口唇部下部は内外面に工具による沈線が見られる。13は頸部から胴部にかけての部位で内外面との横や斜め方向のミガキによる調整が施されている。外面が黒褐色、内面が黒色を呈する。ピット4からの出土である。14は胴部屈曲部にあたる。内外面とも横や斜め方向のミガキによる調整が施されている。外面が黒褐色、内面が黒色を呈する。B区2層からの出土である。

石器（第8図15～17）

15・16は磨製石斧、17は敲石。15はB区2層、16・17が旧河川からの出土である。15は刃部を欠く。現存の長さ12.1cm、幅5.28cm、厚さ2.95cm、重さは273.2gを測る。石材は砂岩。16は長さ9.78cm、幅4.68cm、厚さ1.55cm、重さは85.3gを測る。17は長さ15.55cm、幅7.25cm、厚さ5.4cm、重さは780.5gを測る。

弥生土器・土師器（第8図18～21）

18～21はいずれもB区攪乱層からの出土である。18は弥生土器で逆L字状の壺形土器の口縁部。内外面ともナデによる調整が行われており口縁部端に凹線が施されている。19は弥生土器の壺か甕の胴部。内外面とも縦方向のハケ目調整が施されている。厚手の土器である。20は器種・器形とも不明であるが、おそらく高坏の杯部のくびれ部の破片と思われる。内外面とも横ナデによる調整が見られる。



第7図 嫁坂遺跡出土遺物実測図(1) (1/3)